



医家芸術 夏季号 目次

59巻 通巻623号 (2015年度)



邦楽部ニュース	2
洋楽部・小平ミニコンサート	4

◇医家随想

ふたもじ（2文字）の病気 浜名 新	6
榮久庵先生 出来 尚史	10
江戸の教養人 豊泉 清	15
チエーホフを読む（7） 曠野（ある旅の話） 藤倉 一郎	18
携帯電話 穂苅 正臣	20
生還！バンザイ突撃に参戦した 軍医中尉（5） 美濃部 幸恵	22
協力 美濃部 欣平	

医芸俳壇	31
医芸柳壇	32
医芸歌壇	33
詩	35

◇音楽評論

フェレンツ・フリッチャイの苦悩 (ブームス交響曲第1番ハ短調) 海山 道人	37
---	----

◇アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック 旅行記』②	
日本医家芸術クラブ 編	48
オリンピックやじきた観戦記 岡野 岳郎	50
クエルナバカとタスコ 中橋 光男	69
『春のシャンソンのタベ』開催 白矢 勝一	74

◇ほ ん

クラブ通信	77
透視像	78
編集後記	78



表紙の言葉	34
原稿募集のお知らせ	47

邦楽部ニュース

三月、赤坂「金龍」にて
第二回御座敷懇親会を開催いたしました



披露下さいとのお願いに、大川先生、太田先生、川口先生、小島先生、佐々先生、村中先生、山崎先生、山田先生がお集まり下さり、各自ご自慢の唄と舞をご披露下さいました。皆様お客様をお誘い下さり、総勢十三名で広いお座敷が一杯、賑やかな夜となりました。

さて、乾杯もそこそこに、先生方はくじで順番を決められまして、佐々先生が口開けの新内小唄、続いては小島杏里先生が「鏡獅子」で舞をご披露、山崎先生の長唄、川口先生の小唄と続き、大川先生の舞踊、山田先生の小唄、村中先生の小唄、トリは太田先生の小唄「梅は咲いたか」。

昨年春の御座敷懇親会のご好評を受けまして、今年も山田先生のご助力で赤坂「金龍」にて邦楽部懇親会を開催いたしました。

まだ寒い三月十四日、一人一芸ご

賑々しく夜は更けて行き、あつと
いう間にお開きとなりました。皆様、
お疲れさまでございました。



第六十回邦楽祭は 十一月二十九日 日曜日開催

「」参加お申し込み受付中。
新しい先生も大歓迎です。



お問い合わせは邦楽祭事務局・一村
03-3453-8281・kokkeda1@gmail.com
おで、お問い合わせは邦楽祭事務局・一村
いおわ。

演目数にまだ余裕がござりますの
で、新規メンバーの「」参入、お待ち
しております。

日本橋三越劇場にて第六十回記念邦
樂祭を開催致します。日本医家芸術
クラブの長い歴史とともに毎秋賑や
かな舞台を飾り続けて六十回。還暦
の舞台を皆様とともに楽しみたいと
存じます。

洋楽部・小平ミニコンサート 開催！

2015年5月10日（日）15:00～

シラヤアートスペース（東京都小平市）にて

洋楽部の有志によるミニコンサートが、5月10日（日）に東京都小平市にあるシラヤアートスペースにて開催された。お馴染みのバンド「はぐどばん」の演奏や、フルート、チェロ、バイオリン、サックス、クラリネット、ピアノ、ギターと一緒に多彩な音色が響きわたる素敵なおコンサートとなつた。特別ゲストにテノール歌手のロベルト・ディ・カンディードを迎え、迫力ある唄声に来場者も引き込まれていた。コンサート後は軽食や飲み物で歓談の場が設けられ楽しいひとときとなつた。



フルート・高野 征夫



チェロ・石川 哲



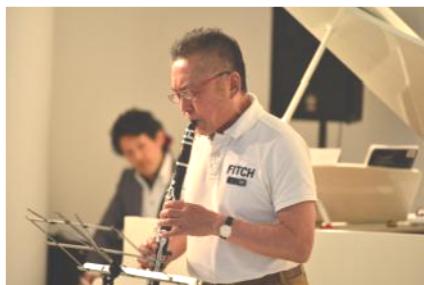
バイオリン・近藤 敦子



バイオリン・半田 あゆ



サックス・小沢 尚



クラリネット・萩原 博道



バンド「はぐどばん」



ピアノ・萩野 仁志



テノール
ロベルト・ディ・カンディド



ギター・白矢 勝一
玉澤 明人



医家隨想



ふたもじ(2文字)の病氣

浜名 新

多摩モノレール脇に僕が勤務する慢性期型の療養型病院がある。モノレールの駅から病院まで歩く場合、M駅からだと約5分強、一方、距離があるK駅からだと約12分要す。僕は天気が良い日、多少、出勤時刻に余裕があれば、健康維持を考え、K駅からテクテク歩くことにしている。街歩きの要領で、周囲を観察し、四季に応じた新たな発見もある。

K駅を降り、市道沿いに送電線を

つなぐ、高く聳え立つ鉄塔が等間隔で設置されている。ある時、鉄塔上

で作業する場面に遭遇した。電気工事人たちは、命綱を体と鉄塔に巻きつけ、足場を固定し、左右の手で仕事をしていた。彼らの眼や耳の機能は健全で、平衡感覚が優れ、足腰も身軽で、経験をつまないと勤まらないだろうと思つた。

雨が降らなければ、土曜日、広い空き地で、地区の少年野球チームの練習が行われている。野太い元気な掛け声が響いてくる。監督推薦で対外試合に選手として選ばれれば、得意満面であろう。規律は厳しく運営

されているにちがいない。この辺りは繁華街から離れ、個人所有の農地、雑草が茂る市有地が手付かずにある。農地の所有者が亡くなると、遺産相続で宅地に申請・変更して売り出されるのか、広大な農地の一角に、戸建てが4棟次々に新築されて数年が経つ。

畑ではレタス・白菜・キヤベツ・ほうれん草・春菊・ねぎ・京菜・トマト・なす・とうもろこし・ジャガイモ・人参・ごぼう・玉葱・サツマイモ・里芋・麦などを栽培している。農家の主は畑を耕運機で耕し、石灰を撒き、肥料を与え、種まき・苗植えし、散水で水枯れを防ぎ、草取りをして作物を育て収穫する。専用の小屋に採りたての野菜を無人販売、1束100円也の値札が・・・。

中年・老年の男女が、時に、農業ボランティアとして、草取りの手助

けをしている。

梨畠では秋口、防虫袋を外し、丹精こめて育てた梨を収穫する。

1月頃、自由自在に伸びた途長枝

を剪定、定期的に地面を耕し、除草、

肥料を与える。3月の芽吹きに備える。

3月末から4月に、清楚で花びらの

厚い5弁の白い花が咲き乱れると、

上向きの花を落として受粉させ、着

果させ、敷地内の井戸から水を撒く。

ある程度、実のサイズが大きくなる

と摘果し、径3cm程度に成長すると

防虫袋をかぶせ、数ヶ月、果実の成

熟を待つ。役割を終えた老木を抜き、

植え替えられた若木がすくすくと育

っている。人為的に樹木の新陳代謝

は必要に違いない。

鉄塔沿いの市道沿いで150メートル×25メートルくらいの土地に、同一業者に建売された20数棟の戸建がある。30坪強の土地に同じ様な

造り・器材を使用した2階屋である。

そのほか、別個に新規に建てた個人

の居宅、アパートなど数棟ある。新

築の建売住宅を購入されたのは新婚

数年の若い夫婦が中心のようだ。何

故なら、戸建ての前の市道で遊ぶ子

供たちは、幼稚園児や小学生が多い

からである。どの家にも自家用車が

駐車し、夫婦で運転するようである。

僕がK駅から病院まで歩き始めた

とき、前記の建売住宅の土地に4棟

分の更地があった。5年前の秋口か、

同じ業者がまず2棟を建て始めた。

市道に面したA棟、A棟に隣接した

奥のB棟である。地鎮祭が行われた

とは思うが、記憶にない。基礎工事

で、建築の土台になる溝が掘られ、

生コンが流し込まれ、固まると、基

礎工事用の仕切り板が固定され、再び生コンが流される。コンクリートの土台に仕切られた裸の地面は、厚手のビニールで覆われ、生コンでカバーされる。建物の四方の土台にある木材の下に、黒っぽい強化ゴム？の器材が設置されることが、条例による地震対策で義務付けられているのであろうか。再近、上棟式が行われているのか否か不明であるが、注文住宅では行われているのかもしれない。2階建てに必要な建築資材が運び込まれ、重機が搬入され、助つ人が駆けつけ、瞬く間に住宅の骨格が出来上がる。天気が危ういと、屋根板をすばやく設置する。大昔では考えられなかつた光景である。大昔、田舎では建前の日に、建て主が紅白の餅・小銭・菓子類を投げ撒く習慣があつた。祝いもちは焼いて食べてはいけないそうだ。——火事などのたたりが起きるからと。水回りの管、暖房用の配管など次々と設置され、外装、細かい内装が終了すると、入

居を待ち望んだ住人が引っ越してき
た。その後、違う業者が新たに2棟
の新築工事を始め、4か月ぐらいで
完成させてしまった。建築士の設計
通り、建材工場で、建材のプラス・
マイナス、正確に木材の裁断が行わ
れ、寸ブンの狂いもなく見事に出来
上がるのは、確かな技術に他ならな
い。

K駅から徒歩通勤するようになつ
て、ちょっととしたきっかけで、A棟
の住人と挨拶するようになった。ご
夫婦で住まわれ、駐車場には軽自動
車が留め置かれ、歳格好から現役を
退き、今回、新築住宅を購入し、余
生を過ごすようとしているに違いない。
数年前、あるすがすがしい朝、通勤
の往路で、僕は、たまたまA棟の戸
主が、前の道路に出て朝日を浴び、
気分転換している場面に遭遇した。
だが、主は松葉杖を使い、ソロリ、

ソロリと歩いていた。僕は気になり、
思わずお声かけをした。

「おはようございます」「今からお
勤めですか」「はい、そこの病院まで」

「え！ 病院ありましたか」「どうな
されました」「事故で右の踵（かかと）
を骨折して、T市の病院で手術をし
ました。まだギブスが外れなくて。
松葉杖を使いリハビリ中です」「かか
との手術は大変でしたでしょ？」「で
も、2週間で退院させられました。

松葉杖を使い慣れなくて…」「移動
なさるのが大変ですね」「まだ、痛み
がありまして」

見ず知らずの通行人から、何気な
いちょっととした挨拶から、住人は返
答をかえしてくれ、会話がつながつ
た。ご主人の風貌と話しぶりから、
僕と同じくらいの年齢と推測した。
なるほど、右かかとには白い分厚い
ギブスが巻かれ、かかとを地面につ

くのに痛みが走るのか、松葉杖でか
かとに加重がかからないように浮か
している。松葉杖を使い、ゆっくり
した慎重な足運びである。別れ際、
「お大事にして下さい」「お気をつけ
て、行ってらっしゃい」この日の挨
拶をきっかけに、A棟のご夫妻と通
勤の行き帰りに挨拶を交わす間柄と
なった。

奥さんは花好きなのか、居宅前の
坪庭には、花の鉢植えがずらりと並
んでいる。水撒きは朝が原則である
が、夏においては、夕方にも散水し
なければならない時もあるようだ。
植物が水枯れでぐつたりしてしまう
ときには必要である。帰り道、奥さん
がじょうろで植木鉢に水をまいてい
るところに遭遇した。「こんばんは、
花の手入れですか」「こう气温が高い
と花が枯れてしましますから」「そう
ですね。近頃すごく暑く、熱帯夜が

続いております」「お気をつけてお帰りください」「ありがとうございます」「ご夫婦ともども如才なく、通行人に接してくれた。

あるとき、ご主人が運転し、助手席に奥様が座り、まさに出発しようとしていたところに遭遇した。挨拶すると、ご主人は「いやね、持病の糖尿病で、これからT医療センターまで薬をもらひに・」「F市でしようと」道中お気をつけ下さい」「ありがとう」車は勢いよく走り去った。高齢になれば、多くの人は持病を抱え、健康維持の面から、病院通いしている。おそらく引越した直後で、かかりつけ医もままならず、多少遠方でも、今まで診てもらっていた馴染みの先生から、薬をもらうほうが、すぐ安心に違いない。

ある年の師走から松が明け、2月になつてもご主人と行き会う機会が

なかつた。たまたまなのか、釈然としないまま、日時が過ぎていつた。ひよつとすると暖かい外国でロングステイしているのかも・・・。

春めいた3月か4月頃か、ある朝の出勤時、奥様とたまたま行き会い、話のやり取りから、ご主人に異変が起きたことを知つた。

「ご主人をお見かけしませんが・」「主人はね、ふたもじの病氣で、あつけなく亡くなりました。ここでの余生を送るつもりで・」「ふたもじの病氣とは、ガンでしょう。何かきざしでもありましたか・」「いいえ、それがぜんぜんありませんの」「どこのが部位のガンで・」「肺にできたガンで。病院で画像診断を受けると、先生からいきなり余命いくばくも無いといわれてしまい・」「タバコを吸われましたか?」「いいえ」「いきなり寿命を宣告されれば、途方に

れましたでしょ」「症状でもあれば、病院へ行かせたんですが・」「足の手術の時には異常なかつたのでしう」「はい。ですから、1年くらいで、ガンが育つたことに・」「暮れからご主人とお会いしませんで、心配しております。苦しまなかつたですか」「ええ、痛みは無かつたですね」「ガンは注意していても、ひそかに忍び寄るのですね」「ふたもじの病気は嫌ですわ・」「お相手がいなくなりさみしいですね」「わたし、車の運転、できないでしよう。ですから買い物が大変不便になり、慣れないと自転車で、事故らないように苦労しています。買い物が一番つらいです」と申上げます。お気を落とさずに下さい。失礼します」「お気をつけて下さい。失礼します」「お気をつけて行ってらっしゃい」

僕は病院に着くまで、2文字の病気で鬼籍に入つた知り合いの人々を想いだそうとした。その姿・風貌は、年々、茫々としてきた。亡くなる経過は、発症したガンの種類、部位(臓器)によりマチマチであろう。長寿社会になり、現在、2人に1人がガンに侵される時代だという。どの治療法を選択するかは、各人の意思が優先するだろう。療養型病院でのガン患者の終末期医療の体験から、悪性の進行ガンに対しても、医療が進歩しても、まだ、太刀打ちできない……。

(H²⁷、4)

「もの 자체はかなりよく描けている。が、影がない。影をつけねばもつと絵が生きてくる」

「はい……」

身の回りにあるものをスケッチしてくるように、というのが夏休みの宿題だった。私は迷った末、使い慣れたピツケルなど登山用具二、三點を描いて提出した。冒頭のコメントはその時先生から頂いたものである。影を付け忘れたのではない。何度もうまく描けなかつたのだ。わずかに混じつた苦味を味わいながら、当時のことを懐かしく思い出している。

先生が東大工学部に講座を持つたのは昭和四十一年。私は三期目の学生に当る。講義は機械工学科の建物で行なわれた。機械系学科の共通授業ということで、私たち航空学科の者も聴講できた。講義の名前はたしか「機器意匠」であつたと思う。片仮名で「インダストリアル・デザイン」としないところが時代を反映していく面白い。

去る二月八日、榮久庵憲司先生が亡くなつた。我が国工業デザイン界の開拓者であり、戦後の復興期から今日まで斯界をリードし続けてきた巨匠であつた。手がけた作品は、日用品、家電、楽器、オーディオ、乗り物、パッケージ、サイン、ロゴマーク、と多岐に亘る。例えば、山本山の海苔、ハーゲンダッツのアイスクリーム、ネスカフエのコーヒー。

榮久庵先生
出来 尚史
〔君の絵には影がないね〕
〔……〕

デザイナーでは、どう想像してみて
もイメージが合わない。冗談だろう
と最初は思つた。

教室に入つてきた先生を見てびつ
くりした。工学部の他の先生方とは
まるで雰囲気が違うのだ。穏和な表
情、深みのある声、聞き手を包み込
むような話しぶり。なるほど、お坊
さんといつても不思議ではない。私
たちは知らず知らず先生の話に引き
込まれていつた。

学生の噂は本当だった。榮久庵先
生は曾て僧職にあり、そこからデザ
インの道へと転じた異色の人であつ
た。故郷の広島が原爆で壊滅した。
それを目の当たりにして、もの作り
による再生を心に誓つたという。東
京芸術大学在学中にデザインingu
ループを立ち上げ、卒業後はGKインダ
ストリアルデザイン研究所の所長と
して本格的な活動を開始した。私た

ちが教わった時にはすでに、ピアノ、
カーメラ、自転車、スクーターなどの
ヒット商品を世に送り出していた。

学生は世事に疎い。とりわけ私は蒙
昧である。醤油卓上瓶の代名詞とも
なったキッコーマンの瓶、あれが誰
であろう先生の作品、と知ったのはず
いぶん後になつてからだ。

講義は「もの作り」の基礎——材
料、成形、形態、色彩の話で始まり、
人間工学、品質論へと進んでいつた。
具体例を挙げながらの解説はわかり
易かつた。通常、工学部の講義には
数式がつきものだ。教官は黒板の左
上から右下まで、書いては消し、書
いては消しを繰り返す。学生は数式
の洪水に溺れ、いつしか現実社会と
の接点を見失う。その点、デザインの
世界は違つようと思えた。

は「もの」は形として現れてこない。
製品として生まれる前にどうしても
通らなければならぬ「門」がある。
デザインという「門」だ。すべての
完成品の影にデザイナーが貼り付い
ている——社内の者であれ、委託さ
れた外部の者であれ——。普段は表
に出ることのないデザイナー、だが
その魂は作品という形をとつて明白
に現出するのだ。日を追うに連れて
そのようなことが私にもわかるよう
になつてきた。

受講生は、デザインの世界に初めて
招き入れられた客人だった。全員が
将来その分野に進むわけではなかつ
たろう。それでも客人である私たち
は神妙に耳を傾け、主人である榮久
庵先生は客ひとりひとりの顔を見な
がら楽しそうに語つた。話に芸術論
や設計が必須だ。しかしそれだけで
無論、機器の制作には綿密な計算
や設計が必要だ。しかしそれだけで

でやや難解。

「すべての人為形態は人間が自然を模倣するか、自然からヒントを得て造形活動を行つたものといえる」

茶室で使われる茶筅や茶碗は、自然を手本とした人工美の極致である、と先生は称賛していた。

「自然そのものではいけない。自然から形を抜き取り、ファードバックする」

このファードバックという言葉がわからなかつた。余分なものを可能な限り削ぎ落とした造形によつて自然を表し出する、という意味であったのか。

「フォルムの簡潔さ、正しさは見る者に喜びを与える。我々はそれを美と呼ぶ」

「頭脳を外界に向けて開いた状態にしておくこと。行動様式が固まるのは避けなくてはいけない」

「豊かなもの、正しいものに目を向け、常に美を求める。エンジニアの心掛けるべきことはまさにそれだ」

その年の秋に先生の著書が出版された。『道具考』(鹿島出版会)。道具

と人間との関わりを深く掘り下げたこの本は、現代文明への鋭い批判書であり、同時に、私たちに向かた未来への道標ともなつていて。教室では語られなかつた内容も多く含まれている。全部で十一章ある。それぞ

れの章の頭には「発意」、「断と縁」、「如意」、「坐歩臥」、「授受一環」など仏教用語が配され、著者自身による手書きのイラストが添えられていて。

以下、重要な箇所を抜粋して要約を試みよう。

「人類による道具の発見以来、道具の世界は人間の世界に寄り添つてきた。道具は人間の生活環境を変貌させ、人間の意識と行動に影響を与え進化を促す。人間発展の歴史はすなわち道具発達の歴史でもあつた」

「人間の欲望には際限がない。これが人間世界を成長させる力であるが、一方で制御を失えば人類を滅亡へと追い込む力となる。道具を作るのも使うのも人間である。人間の欲望に合わせて道具の世界は際限なく膨張してきた。結果として道具世界は混乱し、現代に見る都市の荒廃や諸環境の不調和につながつた」

ここまで来れば、次には人間の欲望を否定し、過度の道具作りを諫める言葉が続くと予想されるが、そうではない。

「欲望そのものは人間に内在する力であり、人類進歩の原動力である」「いかなる道具にも創造の根源、人間の叡知の極限が潜んでいる」と肯定的に述べ、

「これを迎えることが今日の人間の務めである」とする。道具世界の構築にあたつては、

「道具のもつ変革能力を正しく評価し、しかるべき方向性を与えることが重要となる」

それでは、しかるべき方向とは何か？

「道具は道（みち）の具（そなえ）と書く。道というのは人倫の大道のことである。また如意の意を意味する。道具が意の如くあるためには意そのものに意義を見つけなければならぬ」というのは人倫の大道のことである。また如意の意を意味する。道具が意の如くあるためには意そのものに意義を見つけなければならぬ

らを利することにつながる。

「人々が手をつなげて一つの環にながれば、利する心はその環を流れ回転する。この精神風土で育ち成長すれば必ずと人に豊かな風格が生じる。この基盤があつて初めて道具世界は魅力ある生命体として人間のために活動を続けるだろう」

そして言う。

「正直で地味な積み上げと消えることのない人の慈しみを持つて、今日に、また未来に誇りを持てる道具文化を築きたい」

私の力不足で皮相的な解釈に留まってしまったことは許してもらわねばならない。それでもここに上げた言説の数々が先生の創作活動のバッ克ボーンであり、後に続く私たちに道具の姿も自ら高まってくる

また「利他」という言葉も出てくる。他を利することは回り回つて自

一ヵーに就職した。しかし在職期間はわずか二年。もの作りのイロハも学ばず、当然のことながら先生の教えを活かすこともなかつた。不肖の弟子第一号である。

もの作りの世界から離れて久しい。今では脳の中身もすっかり変わつてしまつた。痕跡を留めていとすれば、それは道具や機械を見るときの「眼」であろうか。どのような工夫が凝らされているか、どのような考えのもとにこの形は生み出されたのか——いつの間にかこんなことを考えている。日ごろ見慣れた製品にも新しい発見はあるのだ。使う側から作る側へ、視点を変えるだけで世界は違つてみえる。それがまた楽しい。昭和が終わつて平成になつた。新聞でたびたび榮久庵先生の名前を見かけた。デザイン活動を通じての文化への功績が高く評価され、国内、

国外での受賞が続いたためだ。記事になるたびにキッコーマン卓上瓶の写真が出てくる。これには苦笑した。空前のベストセラーとはいっても昭和三十六年の作品だ。その後の創作の方が質も量も圧倒的にスケールが大きい。醤油瓶を馬鹿にするわけではないが、「榮久庵、すなわちキッコーマン」なる一対一対応はいかにもメディア的で、情けなかつた。

個人的に言わせてもらえば、先生の作品の中ではヤマハのVMAXが好きだ。流れるようなフォルムといふのではない。V型4気筒一七〇〇ccのエンジンをきつちりと納めた重厚感がなによりも素晴らしいのだ。

この形状なら高速の空気には負けない。後方に向かって無理のない流れを作り出せるだろう。強い接地力で安定した加速が得られるだろう、と心が弾む。残念ながらそれを確かめ

る機会は私には訪れなかつた。大型自動二輪の免許は早いうちに取つたが、バイクとは縁の遠い人生だつた。このことは私の後悔リストの上位に位置している。

榮久庵先生は最近では都市づくり、街づくりにも力を入れていたようだ。道具と人間とが調和する空間、安らぎのある美しい都市景観の実現を目指して、街路や広場、サインなどの設計を手掛けってきたという。生活環境の整備は地球規模の環境改造へと広がっていく。今やGKデザイングループは海外に四つの拠点を擁する国際的な創造集団である。その活動に国境はない。豊かな世界づくりには、地域性を重視しながらも、政治、宗教の枠に縛られない取り組みが必要とされる。

朝は太陽神のチャリオットを造り、夕はかぐや姫の牛車に工夫を凝らす。神々のオフィス、貴人の住居空間を整備し、さらには天界の環境大改革に挑む。パワーを漲らせて奔走する先生の姿が見えるようだ。遠からず活動報告が地球へと配信されることだろう。メールの最後にこんな文を

ことに壮大な精神世界、物質世界へ至ろうとしていた。一昨年インタビューの最後にこう言つたという。「やりたいことはまだたくさんある」八十五歳といえば、功なり名を遂げて引退も良しとする年齢だが、先生の場合には「道、未だ半ば」の気持ちだつたろう。それでも、心残りとか未練とかという言葉は先生には似合わない。きっと今頃はここよりもはるかに広い世界にあり、創作意欲を全開にして新しい仕事に取り組んでいるに違いない。

添えて——「そちらの様子はどうですか？」さあ大変だ。「ここは大丈夫です。地球のことは私たちに任せ

て下さい」こう元気によく答えた。

今日の科学、技術は猛烈な勢いで進歩し続いている。それに裏打ちされて夥しい数の「もの」が生まれ、そして消えていく。量だけでなく質の変容も凄まじい。「人が道具を変え、道具が人を変える」というが、両者の歯車は既に噛み合つていよいよ見える。無為に流されてはいけない。果てしない負の連環に巻き込まれる前に踏み止どまり、よくよく考えるべきであろう。「もの」を作る人、使う人、双方の勇気と叡智が試されている。そう私は考える。

榮久庵先生の教えは深く、私たちに課せられた宿題は重い。

江戸の教養人

豊泉 清

おつかさんまた越すのかと孟子言い

孟母三遷の逸話を踏まえている。

川柳を紹介してみたい。

色男 金と力は 無かりけり
大男 総身に知恵が 回りかね

孝行の したい時分に 親は無し

町内で 知らぬは亭主、ばかりなり

女房の 妬くほど亭主 持てもせず

泥棒を 捕らえてみれば 我が子なり

皮一枚 剥げば美人も 膚體（され

こうべ）

大勢の人に親しまれていて、あたかも成句や慣用句のように口にする江戸川柳がいくつもある。「孝行をしたい時分に親は無し」を、現代の長

寿社会には「孝行をしたくないのに親が居り」と詠み換える親不孝者もいる。惚れ惚れするような美人でもやはり論語の過則勿憚改（過てば即ち改むるに憚ること勿れ）を下敷きにしている。

過つて憚らず来るふてえ奴

やはり論語の過則勿憚改（過てば即ち改むるに憚ること勿れ）を下敷きにしている。

月落ち鳥鳴いて女房腹を立

ではここから私が大いに興味を抱い

……という漢詩の一節が織り込まれている。夜遅くまで起きていて亭主の帰りを待っているのに、夜遊びに熱中しているのか、なかなか帰つてこないと女房が立腹である。

人同じからず花見の仲間割れ

年年歳歳花相似、歳歳年人不同
という漢詩の一節が織り込まれている。花見の宴会で酒に酔つて喧嘩が始まつた。

長い詩のそばに空き樽空き徳利

唐代の李白という詩人は酒豪としても鳴らした。同時代の杜甫という詩人が「李白一斗詩百篇」と詠んでいる。李白は酒を一斗飲むと詩を百篇も詠んだ。一斗は約18リットルに相当する。李白の部屋には常に空き樽や空き徳利がごろごろ転がっていた。

見世物にしたい白髪を詩につくり

李白が白髪三千丈、縁愁似箇長：

……という詩を詠んでいる。三千丈と言えば、長さが約9キロメートルの白髪である。誇張表現の横綱格である。

始皇帝無学な奴を出世させ

秦の始皇帝は学問の書物を焼き捨て、学者を生き埋めにした。焚書坑儒と呼ばれる暴政である。その結果、字も満足に読めない高位高官が続出した。

足音がすると論語の下に入れ

眞面目に漢文の勉強をしているふたりをして、実はエロ本を読んでいた。人が近付いてくる足音が聞こえたので、慌てて漢文の本の下にエロ本を隠した。

冠を直さぬ場にて一つもさ

「李下に冠を正さず、瓜田に履くことを納（い）れず」という漢文がある。李（すもも）の木の下で傾いた冠を直そうと思つて両手を挙げる

と、李を盗むのかと疑われる。瓜畑で靴の紐を結び直すと前屈みになると、瓜を盗むのかと疑われる。人に疑われるような行為はするなどい

う戒めである。「冠を直さぬ場」とは李の木の下である。冠を直さずに果物を一つ失敬した。

ではここで趣向を変えて日本史の故事を詠んだ江戸川柳を披露してみたい。

古池のばちゃんが来世まで響き

松尾芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を題材にしているなど瞬時に理解できる。

玉虫は毛ない役を言い付かり

屋島の源平合戦の際に、平家軍から一艘の小舟が源氏軍に近付いてきた。舳（へさき）に扇が掲げてあり、乗つている女官が「矢で射てみよ」という身振りをした。源氏軍の弓の

名手の那須与一が見事に扇を射抜いた。平家の女官の名前が玉虫である。もし与一が矢を射損なれば玉虫が即死という場合もあり得るから、まことに危険な役割である。

山伏に釣鐘一つきの損

若い修行僧の安珍に清姫という娘が恋をしたが、安珍は修行中の身なので女を遠ざけた。清姫は逃げる安珍を執拗に追いかけた。安珍は道成寺の釣鐘の中に隠れた。清姫は大蛇に変身して釣鐘に巻き付き、安珍を焼き殺した。釣鐘が高熱で溶けてしまつたので寺は大損である。安珍・清姫の激しい恋物語は歌舞伎の代表的な演目にもなつていい。

四日目は明智日陰の守となり

明智光秀は織田信長を倒した数日後に、豊臣秀吉に倒されたので、三日天下という言葉が生まれた。光秀は日向守(ひゅうがのかみ)だから、

四日目以後は日陰守(ひかげのかみ)と揶揄された。日向(ひなた)と日陰が対になっている。

あくる日が夜討ちと知らず煤を取り

江戸の町は12月13日が大掃除の日と決まっており、江戸中の民家が一斉に大掃除をした。「煤を取る」は大掃除を意味する。忠臣蔵の見せ場である赤穂浪士の吉良邸討ち入りは12月14日だった。翌日が討ち入りとも知らず、吉良邸でも恒例の大掃除をしていた。

遠慮してひんとは鳴かぬ佐野の馬

佐野源左衛門は大雪の晩に旅の僧侶を泊めたが、貧しくて客をもてなすものが何もないで、大事な盆栽を伐り、囲炉裏で燃やして暖を取つた。謡曲「鉢の木」の題材となつた逸話である。旅の僧侶は鎌倉幕府の北条時頼だつた。佐野家で飼われている馬は、主人があまりにも貧しい

ので、遠慮して「ひん」とは鳴かない。馬の嘶(いなな)きの「ひん」と「貧」の掛詞である。

九十九は運び一首は考える

藤原定家が小倉百人一首を編纂した。九十九首は他人の作品を選んだが、自分の作品も一首だけ入れた。定家が詠んだ和歌は「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻塩の身も焦がれつつ」である。

露から秋風までは長い嘘

京都に住む能因法師は、東国旅に出ると偽つて自宅に引き籠つた。そして旅先で詠んだと称して「都をば霞と共に立ちしかど秋風の吹く白河の関」という和歌を披露したが、後に嘘が露見した。

秋はさぞやかましかろう喜撰さん

喜撰法師が「我が庵は都の辰巳鹿ぞ住む世を宇治山と人は言うなり」という和歌を詠んでいる。鹿は秋に

なると鳴く。「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき」という猿丸太夫の和歌もある。秋になると鹿の鳴き声がさぞやかましいだろうと川柳子が想像している。

雨乞いも袖乞いもして名を残し

小野小町は雨乞いの和歌を詠んで雨を降らせた。絶世の美人で教養も豊かだったが、晩年は乞食同然の境遇だったようである。袖乞いは乞食のことである。

実のならぬ花で実のある返事なり

大田道灌が狩猟の最中に夕立に見舞われ、雨具を借りに近くの農家に立ち寄ると、その家の娘が一枝の山吹の花を盆に載せ、無言で道灌に差し出した。「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞ悲しき」という古歌に託して、お貸しする雨具が無くて申し訳ないと伝えたつもりだが、道灌には通じなかつたという

逸話がある。「実の」と雨具の蓑(みの)の掛詞を利用している。

江戸庶民は漢文や和歌や俳句や歴史上の人物の逸話などに精通していることが、これらの川柳から窺い知れる。寺子屋という教育制度のお陰で文字や読書に親しむ習慣が涵養されたに違いない。江戸庶民は現代人よりも遙かに教養が豊かで、文学的な知識を駆使して川柳をひねり、精神的に潤いのある日常生活を送っていたに違いないと、私は江戸川柳を鑑賞しながら驚嘆している。

チエーホフを読む（7）

曠野（ある旅の話）

藤倉 一郎

説を書いていたが、1886年27歳の時、老大家クリゴローヴィツチから激励の手紙を受け取り、はじめて本当の文学と自分の才能を認識して小説を書き始めた。そして初めて書いたのがこの長編「曠野」である。風俗描写だけでなく、心理描写もできるようになったと言っている。チエーホフはこの作品に強い意気込みと不安を持ちながら書いた。クリゴローヴィツチは1840年代に写実的な小説で「躍文壇」に名をなした作家で、ツルゲネフと並んで当時のロシヤ社会の日を苛酷な農民の生活に向けさせた作家で、名だたる作家が一線を退いた後、1880年代に文壇の重鎮として君臨した。

商人クジミヨフの妹の息子9歳のエゴールシカが市の中学へ入ったための旅の物語である。古ぼけた、薄汚れた馬車には羊毛商人のクジミチヨフとリストフォル神父とエゴー

ルシカの3人がのり、御者はデニースカだつた。なつかしいN市の風景がすぎるほど、曠野だつた。エゴールシカは何のために行くのかよくわからなかつたので、悲しかつた。母がエゴールシカを中学に入れたいといふので、兄のクジミチヨフに頼み込んで、中学へ入るために遠い市へ行くのであつた。フリストフォル神父が、「心配ないよ、学問をしに行くんだから」と慰めてくれた。

曠野は退屈で、炎熱のなか馬車にゆられていた。小川のほとりで弁当を食べ、クジミチヨフと神父は馬車の下で昼寝をした。エゴールシカはデニースカと走つたり、虫を捕まえたりしていた。しばらく休憩した後出発して夕暮、旅館に着いた。家具もろくにない質素な旅館だつた。クジミチヨフの羊毛を運んでいる荷馬車隊は今朝ここを出発し、もう一組

は夕方出発したということだつた。クジミチヨフとフリストフォル神父は金勘定をしていた。先発の荷馬車隊に追いついたクジミチヨフはワルモーモフという大商人に会うためにエゴールシカを荷馬車隊にあずけ別道を行くことになつた。

荷馬車隊には6人の御者がいたが、それぞれかつてはそれなりの生活をしていたが、今は落ちぶれてこの仕事をしているのであつた。少年の目の前で刻々と変化する豊かな曠野の自然が、少年の目を通して描かれてゐる。旅の途中でドワイモフはエゴールシカにいじわるしたのでエゴールシカは彼を憎んでいた。休憩して食事をするときみんなで魚をとり、それを料理して食べたり、暑い日中はゆっくり休憩して、夕方出発した。エゴールシカは馬車の荷物の上に乗つて、孤独な旅をつづけた。夜中に

焚火をしながら、荷馬車隊仲間のパンテレイという老人の怖い話をいくつか聞いた。そこへ見知らぬ男が野雁を撃ち落としたから、買わないかと言つてきた。彼は結婚したばかりで、嬉しくてそれがしやべりたくて仕方ない様子だつた。でもエゴールシカはなぜ結婚するのか、なぜ女がいるのか、よくわからなかつた。

小休止のときドワイモフが仲間のエメリヤンにからんで喧嘩になりそうちだつた。ドワイモフは良家の生まれだつたが、痼疾もちで短気な性格だつた。

ひどい雷雨に襲われてずぶぬれになつたエゴールシカは寒氣がして、嘔吐し、熱が出てしまつた。桟橋の近くの商人宿に泊まることになつたが、そこには伯父クジミチヨフとフリストフォル神父とデニースカが既にきていた。エゴールシカはほつと

した。そして神父がバターと酢を全身に塗つてくれたので、なんとか落ち着いた。

クジミチョフ叔父はエゴールシカを預けることになっている妹の友達のナスター・シャ・ペテロヴィナをあちこち探してようやく探し当てた。そして月10ルーブルの送金でエゴールシカを中学にやつてくれるよう頼んだ。クジミチョフ叔父はエゴールシカの中学校入学の手続きをして帰った。エゴールシカは見知らぬ土地に一人置き去りにされたような気がして悲しかった。エゴールシカの生活はどんなになつていくのであるうか。

旅の途中のエゴールシカという少年の目にうつった曠野の情景が鮮やかであり、孤独な少年のわびしい想いが読み取れる。クジミチョフ伯父

やフリストフォル神父や御者のデニースカの心理描写も生き生きとしており、荷馬車隊の御者の一人一人の性格や表情まで細かく描かれている。

少年の目に映る大人の世界の現実が厳しい。はげしい雷雨の中の旅は少年だけでなく、だれもが大変だった。少年はこの苛酷な環境の中で病氣になり、落ち込んでいるとき、伯父や

神父にあいねんごろに手当てを受けた。文句を言いながらも伯父は少年の身の上を案じ、妹の友人をやつと探し当てて、中学に入る少年をあずけて帰るのである。少年

の心細い心情が読むものに伝わってくる。

携帯電話

穂刈 正臣

それは今から25年も前の八月のことだ。午後になると、特に蒸し暑さが感じられた。16番ホールを終え、次のホールへ向かう途中で、突然、友人が、

「気分が悪いのでゴルフをやめて、休みます」

と言つたのである。もうすぐ午後のハーフも終わるのに、と思つたが、彼の口調の真剣さからして、「休んだほうがいいよ」と私は答えた。その時運よく、ゴ

ルフ場の巡回自動車が通りかかり、彼を載せて走り去つた。

いつものようにプレイを終えた私は、クラブハウスにいるはずの彼を探した。しかし、どこにもいないので、ゴルフ場のデスクに聞くと、近くの診療所へ行つた、とのこと。その診療所に電話を掛けた。すると、

「今、点滴をしています。もうじき終わるのでゴルフ場へ戻ります」

というものが看護師の返事であった。帰つて来た彼は、いつものようなら元気がなく、

「今日はここに泊まる」

と言つた。心残りではあつたが私は彼を残して、帰宅することにした。翌朝、早速ゴルフ場へ電話をかけた。支配人が言うには、

「どこかに入院させないと駄目です」

近くの病院には知り合いの医師もいなかつたが、少し離れている某病

院に後輩がいるのを思い出し、彼に頼んでそこへ緊急入院させてもらつた。

それから三日後、電話が病院から会社にかかってきた。知り合いの医師が云うには、「彼はもう駄目なようだ」

聞いた途端私は、「そんなバカなことがあるか、あんなに元気だったのに」

と思った。だが、私はすぐさま会社の看護師さんと一緒に自動車で病院のある宇都宮へ向かつて高速道路を突つ走つた。

ベッドに横たわる彼は一昨日一緒にゴルフをした時とは全く様子が違つていた。意識は朦朧として声はか細く、全身にむくみがあり、全く別人だつた。そして家族さそも彼をあきらめている様子である。私は「大学病院に救急車で運ぶ」と家族に話

した。

その頃、私の自動車には携帯電話が設置されていたので、大学の各内科の教授に「彼を何とか助けてくれ」と車内からお願ひした。彼は救急車で二時間近くかけて大学の急患室に運ばれた。そこには各医局から動員された多くの医師で患者が見えないぐらい集まつていた。

その頃は、都心の大学病院の医師は、日射病、とか熱中症とかの患者を診る機会がすくなかったのである。彼はあらゆる症状を示していた。いわゆる多臓器不全である。腎不全、肝不全、心不全、呼吸不全があり、血液検査でも異常値が現れていた。友人の教授が「農薬でも飲んだのは」、と言つたほどである。

排尿も診ないで点滴を続けたのか体重は5キロほど増えていた。そこで一週間かけて水抜きの人工透析と

パルス療法などが行われた。

重症の熱射病では 60—80% の高い死亡率が報告されているが、彼は奇跡的に後遺症も残さずに助かった。親しくしていた友人達は元気になつた彼を見て喜んだ。一番喜んだのは家族であろう。

れている。

ある日、そんな彼から電話があった。彼は現在会社を辞めて一人で会社を興し勤めている。どこにも異常がみられずに元気な様子であった。

大学病院にいた医局の先生たちの

協力によつて彼を助けることができた。このことは、「医者は、患者さんを最後まで諦めてはいけない」という私の教訓にもなつた。

バナデルの洞窟へ

(玉碎突撃前には海軍野戦病院でもあつた)

"六月もなんとか生きのびて七月となる。私の三十六年の人生もあと三日か四日だろう" (ある陸軍参謀)

彼は、倒れる以前の一ヶ月間は仕事が大変忙しく、ホテルの部屋に籠りつきりで仕事をしていた。彼が倒れた日は特に暑かつたが、昼の食事はスイカを食べ、生ビールをジョッキで飲んでいた。水分は充分に摂つてはいたが、アルコール摂取と疲労、急激な蒸し暑さが彼の倒れた原因だったと思われる。

その頃は今と違い、熱射病というものにそれほど関心がなく、患者の発生も少なかつたのであろう。彼の入院時の記録は何回も学会に発表さ



日本軍最後の司令部を置いた地獄谷にも、艦砲や高地に進攻した米軍陣地から敵弾が雨のように降つてくる戦況となつた。

7月2日 地獄谷付近にも砲弾の落

生還！バンザイ突撃に参戦した軍医中尉（5）

協力 美濃部 幸恵
美濃部 欣平

下がいよいよ激しくなってく。

段の床が張られてある。』

この日海軍司令部から、

「わが海軍機がバナデル飛行場へ緊急着陸するかも知れないから、2

6・1空の全員は飛行場近くの洞窟に移動すべし」

との命令が来たので、深夜井手軍医は、医務隊員と共に負傷者を連れトラック3台に分乗し、ほかの者は徒歩でサイパン最北端の洞窟へと移動して行くのです。

7月3日 『午前3時ごろ、以前より海軍の工作隊が手を加えていた洞窟に到着する。

洞窟の周囲は熱帯樹林におわれ、入り口は径3メートルほどあった。そこから約5メートル、斜めにハシゴで降りる。内部は広く奥行きは7・8メートルはあった。木材で数

負傷者を収容し、医務隊、主計隊等はここに駐留し、命令を待つ事になりました。

洞窟の暗闇の中にロウソクと灯油の光が点在し、光の周りに数人ずつが集まっていました。

軍医としての仕事は、一日中負傷者の診察と包帯交換で、とくに傷口にわくウジ虫の除去に追われたとあります。

食糧は、もうにぎり飯などではなく、乾パンとわずかな飲料水がくばられる洞窟生活だったと書いておられます。

サイパン戦を通して日本兵や避難民を苦しめたのは、極端な水不足でした。

珊瑚礁のサイパン島には、ドンニ



①バナデルの海軍洞窟へ
JACKさんがチャモロ人牧場主さんから洞窟の場所を聞き出しました。



②偵察からもどるJACKさん。
“スゴイ洞窟がありましたよ”
右下) 道路向かい側には、マッピ山。
崖下にあった海軍戦闘指揮所には(現在のラストコマンドポスト)上田猛虎司令官等がいました。

一、タロホホ、極楽谷などの限られた水源地の他は、真水の河川は皆無であり、島民は雨水をタンクに貯めて使つていました。

『負傷者は次第に衰弱していく。全員が栄養不良で体力が落ち、そのうえ吹き出物や、シラミの発生にならまされる。ビタミンAの不足の結果多くの者に視力の衰えがめだち、夜盲症の症状があらわれた。』

7月5日ごろからは、陸軍部隊や民間人も洞窟に集まつてきました。

医務隊は海軍、陸軍そして民間人も区別なく、軍医長の指揮下ひたすら治療にあたります。

戦死者は夜のうちに洞窟の外に搬出し埋葬していたそうですが、戦局が悪化し米軍攻撃が激しくなると、死体を木陰に安置するのが精いづば

いとなつたと記述しています。

タボーチョ山の争奪戦に勝利した米軍は島の北端に向かつて進撃を早めた。

日本兵と避難民は入りみだれて、北へ北へと追つめられてきました。ぼろぼろの衣服をまとい飢えと渴きに苦しみながら、ガラペラ方面やマトイス方向から最北端のバナデルへと集まつて來たのです。

日本を発つ前に希望を伝えましたらヨネコさんや、元米兵の戦跡ガイドもするジャックさんが、現地の伝え聞きルートをたどつて場所の見当をつけさせてくださいました。

註：書物によりバナデルまたはバナデロ、バナデルの記載があります。本文では井手先生の著書で使われたバナデルに統一しました。

「サイパン陥落後、洞窟は米軍がブルドウザーで入り口をふさぎ、今ではタガンタガンのジャングルの中

にあり、現地の人すら足を踏み入れることの出来ない場所になつていました。」と書いておられます。

井手先生

井手先生が再訪してからさらに四十五年後に、（第十二回サイパン戦跡めぐり 2014年12月9日）

夫と私はサイパン戦末期に野戦病院にもなつた井手先生の海軍バナデル洞窟を探す目的でやつてまいりました。

日本を発つ前に希望を伝えました

らヨネコさんや、元米兵の戦跡ガイ

ドもするジャックさんが、現地の伝え聞きルートをたどつて場所の見当

をつけさせてくださいました。

註：書物によりバナデルまたはバナデロ、バナデルの記載があります。本文では井手先生の著書



③太い蔓と枝の手すりにつかまりながら、階段状に掘られた坂を下りていきます。



④山林を海側へとけもの道を下りていきました。
やがて一同あっと息を呑む。
ありました！下方に洞窟が、黒い口をあけて。



⑤歳月の経過が感じられる大きな洞窟です。
“井手先生！わたくし達探して参りましたよ。
先生が御本に書かれた 70 年前の海軍洞窟の
野戦病院跡に”



⑥この洞窟に海軍の傷病兵の他、陸軍部隊や逃げてきた民間人も集まっていました。
井手軍医等医務隊員は一日中患者の手当てに追われていました。



⑦さらに奥の方に洞窟は続いています。



⑧当時の分厚いガラス瓶の底が残っていました。
木片　「洞窟には、海軍工作隊により木材で数段の床が張られていた」と井手先生の記述にある。朽ちた木片が土埃の中に残っていました。



井手先生は洞窟には「入り口から5メートルほどハシゴで降りた」と回想しておられる。今回私たちは、何時頃つくられたのかはわかりませんが、蔓や枝を使った手すりとジャングルの急勾配を階段状に整えた坂道を往復することが出来ました。推測ですが戦後、旧海軍関係者が遺骨収集にこられて蔓や枝を使った手すりとジャングルの急勾配を階段状に造られたのではないでしょうか。(ヨネコさんは現地の人がこのような設備を作ることは絶対にないと言います。)

バナデルの飛行場は、開戦後に建設が開始されたが、完成をまたず6月11日からのアメリカ軍の爆撃で破壊され、ほとんど使い物にはならず日本軍の飛行機が飛ぶことはなかったのです。

バナデル飛行場の背後には、マツピ山249メートルの岩山が屹立している。

米軍の占領宣言前後の頃には、マツピ山と北端のバナデルに追い詰められた日本軍兵士や一般邦人が、この地域に大勢なだれ込んできました。鬱蒼とした熱帯樹林の先は高さ二百メートルの断崖と、荒海が広がるだけ。もう逃げ場はありませんでした。バンザイ岬の投身自決と同じような凄惨な悲劇が繰り広げられた場所でありました。

米軍報告書は語る

IBでは、アメリカ人にとって理解しがたい日本兵の玉碎や自決の行為を以下のように分析しています。



太古の時代を思わせる巨大な堆積岩にはサメの歯型の空洞が。

下方は海への断崖。

わずかの間居るだけでも恐ろしいような所です。

この洞窟で覚悟の自決をされた軍医、重傷兵、追いつめられた一般邦人の方々の苦しみ、絶望、無念、悲しみに私たち一同御靈やすかれとご冥福を祈るばかりの戦跡でした。

—— (261 空最後の海軍野戦病院跡) ——

- ▼ 彼らが死ぬまで戦ったのは、降伏を禁じられ、捕虜は恥辱とされていたからである。
- ▼ 日本兵はアメリカに捕まつたら殺されると思っていた。「鬼畜米英」のプロパガンダによる虐待の恐怖。
- ▼ 捕虜になる不名誉と、本人や家族が被る社会的迫害をなにより怖れていた。

- ▼ 日本兵捕虜たちは降伏という不名誉のため、絶対に日本に帰ることはできないと主張した。

また、ディスカバリーチャンネルで現在の軍事アナリストは次のように語っています。

日本軍は武士道精神による自決、玉碎を行い、多くのアメリカ兵の命を道連れにした。太平洋戦争の日本軍は強敵であつたと。



通称ラストコマンドポスト（最後の司令部跡）
マッピ山の崖下にあり岩山の窪みの中に造られている。
旧日本海軍の監視哨要塞であり、サイパン戦末期
は戦闘司令部が置かれていた。
戦時中は熱帯樹林に隠れた場所であったろう。

上田猛虎司令官がいた！戦闘司令部
現在はサイパンの観光スポットになつていて「ラストコマンドポスト」と名付けられた戦跡になつています。標高249メートルのマッピ山の嶮しい崖下の自然窟を利用した海軍監視哨要塞でした。当時は海軍部隊の上層部が集まり、最後の作戦指揮をとつていた所でした。

今日、周辺は整備された広場にな



要塞の入り口は岩山の窪みにあり、身をかがめて入らねばならない。

り旧日本軍の機関砲や戦車などの武器も集められ太平洋戦争（大東亜戦争）の史実を物語つている場所です。さらに日本政府によつて建立された中部太平洋戦没者の碑、沖縄移民犠牲者のおきなわの塔、韓国人慰靈碑などがあるメモリアルパークとなつています。

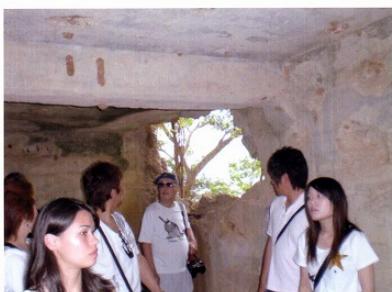
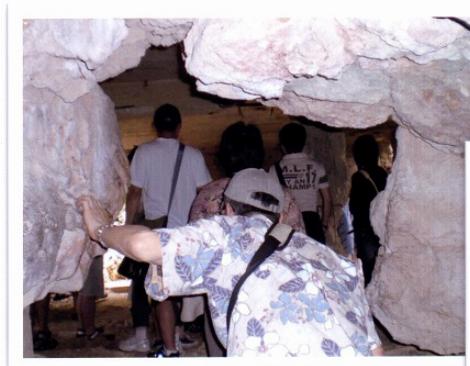
弾痕を残し破壊された機関砲などを見にしながら、石の階段を上つて、荒々しい岩山の狭く低い要塞入り口から身をかがめ入ります。

じきじきしてきます。こうして内部に入り、かつて日本兵が戦った戦争の現実に出会い少なからず衝撃を受けるでしょう。

内部は鉄筋入りの分厚いコンクリートで堅固に造られています。天井



直撃弾が突き抜けた2メートルほどの穴が開いている。



観光スポットになっているラストコマンドボスト（旧日本海軍監視哨跡）若い人達も、熾烈な戦争の現実に厳粛な面持ちで真剣に説明を聞いています。

要塞は『外部からはまったく発見されないようにしてあり、艦砲の砲弾にもたえられる堅固な造り』（井手先生記述）だったそうです。

しかし私たちが目にしたのは、直径2メートルほどの砲弾がつきぬけ分厚い壁に開いた大穴、無数の銃痕、鉄筋が剥きだした天井、火炎放射器で焼かれた内部でした。

当時ここには、どのような人が何人位いたのでしょうか？

* * * * *

今から70年前、二十代の井手次郎海軍軍医はこの要塞に来ているのです。

1944年7月4日の夜、バナデル洞窟から一キロほどのこの戦闘指

も高く、50人ほど入れる広さかと思います。

揮所に兵二名をつれ、主計中尉と共に連絡にきました。

『その中には十数名の主として海軍佐官級の立ち姿があわいロウソクの光を中心に集まり作戦會議中であった。』

上田猛虎司令官から、戦況不利の状況と、ここにおいて日本軍の救援部隊上陸の望みも絶えた。最後の総攻撃を敢行するので、全員総攻撃用意 待機せよとの命令を受けとる。これを受けて深夜に洞窟にもどり岡本軍医長にその旨を報告したのです。

次回日本兵総攻撃へ つづきます。

参考引用文献

精強261空^一 虎部隊 サイパン戦記

井手次郎 潮騒房光人社

日本軍と日本兵

米軍報呈書は語る

一ノ瀬俊也 講談社現代新書



マッピ山の岩山の下に日本政府により建立された

「中部太平洋戦没者の碑」がある。

医芸俳壇



兵庫 廣辻 逸郎

新緑に埋もれて妻の声返る

芝桜広し蒼天雲もなく

自撮り棒娘らよく笑うバラの園

小さき風九尺の藤揺らして

大藤に透けて温顔六地蔵

新潟 中村 雄彦

年毎に枚数の減る年賀状

新築の家の屋根にも雪積もる

初場所の横綱まわし取らず勝つ

孫ほどの背丈の老女若菜摘む

暖かに猫はつらつと話する

東京 福富清子

流るる雲と風の交信柿若葉

登校児跳ね跳ねお早う夏は来ぬ

花は葉に友だち何人できたかな

藤房に背丈競ひし友逝けり

夕影に朱しるき蠶徽名はアンネ

東京 小南丁字

年の瀬や浅草名物手形撮る

ダブル富士水面の初富士ダイヤモンド

一葉の知られざる館春の的

臘梅の綻びのぞかせ垣根越し

大鵬越え白鵬初場所恩返し

静岡 岩本漂人

箸指けばツツドリの声滝の音

キジバトの鳴けば三時のわらび餅

浜名湖にアオバトの来て薄暑かな

神木の森に一声サンコウチヨウ

鳴き交わすアカショウビンと河鹿笛

東京 福神規子

讃州に古りしみさざぎ夏落葉

をがたまの花咲く頃の御陵かな

河鹿宿朝の竈の火を熾し

草笛や平家の裔として老いて

桐の花遠まざしは父に似て



医芸柳壇



青森 秋元光博

カミソリと言われた頃は夢も見た

言い訳のように溶けてく角砂糖

夏まつり何処も彼処も平和な灯

時々は前頭葉が欠伸する

親と子の異次元回路すれちがう

東京 小南丁字

青森 秋元光博

ステアートカップ鑑賞息を呑む

日本海次世代資源燃える水

羽生ヶガ王者の滑り3連覇

日米のギネスの老齢入れ代わり

四十年代イチカズ旭天離れ業

多彩なる昭和を生きたカニぶたい
晩学の小さな夢を諦めず

我慢して良かつた答汗がくれ

通りやんせ子供の声が消えた路地

こうの鳥我が家にほしい子を受け

群馬 豊泉清



箱根山噴火で再び天下の陰

法改正戦死が復活おくやみ欄

四年後も掛け声だけの瓦礫処理

選良は辞書の中だけで生きており

父と子が家具屋で椅子の奪い合い

医芸歌壇



曼珠沙華1

青森 秋元光博

たましいの一本立ちの木賊には葉なし花なしなきぞすがしき
美吉野も那智九十九里浜も不一ヶ嶺もでたきかなや君に詠まれて
逢いたけれ心細けれ悲しけれ君待ちたまふ十万億土かな
雪作るほとけもろもろ釈迦仁王藏王の山の樹氷佛かな
天近き千和田の湖は寂寞と今も太古の空を映せり

春の庭 茨城 羽生藤伍

わが庭の小径を飾る雪柳そよ風に搖れあふれる如し

春なれや若葉の緑色冴えて躊躇は紅や白も咲きたり

紅き芽の緑となりぬ石榴の樹また赤き実の裂ける日を待つ

散歩路に見し荒畠にわが犬を放てば狂喜乱舞の如し

散歩路に馬頭観音像ありて札をすべきか時々迷う

曼珠沙華2 東京 秋元光博

病床の子規の獅子吼にこの国の魂衰へし歌よみがえり

我の行く黄泉のやみじき照らすもの星にほたるにほほづき提灯

曼珠沙華十方無碍の花びらが宇宙をつかみ宇宙を放つ

天涯の孤独のごとししんしんと降りつむ夜半の雪を聴くとき

空の月掌に水張れば掌に来たるこぼせば散りて空に帰れり

眼球注射 東京 横田英夫

地下鉄の吊広告の女優像左眼にて見れば恐ろしき顔

黙々と予約時間に歩み行く進まぬ心励ましながら

処置室の大型の椅子に坐り居りさながら吾は俎の鯉

目眩みて眼球注射終りたり渦巻く液をまなうらに見る

意外にも視力改善せりと言ふ左眼の歪み直らぬままに

カルピスとレモンティーとの缶一つ八月尽に並べ飲みをり

缶 東京 小松安彦

午後七時過ぎれば蟬の鳴き声は途切れどぎれになりて鳴き止む

ボリバケツの中で跳ねてるこぼろぎを七月尽の庭へと放つ

立秋の深夜にこぼろぎ鳴いてゐてアルデバラ・レカ・ペラが昇る

白山の山頂に立つなかな北アルプスは見せぬ全容

中村宏個展寸描

東京 林 宏 匡

暑き日に中村宏の絵に会ひて汗退きにつつ戦を怨む
目ひとつに画く思想は何処より湧き出でしかも宏と茂
キャンバスに画かれしまなこに見つめられ恐ろしくもあるかわれ立ちつくす
空を飛ぶ列車地を這ふ飛行機を画さし宏のいさぎよき異質
曇天に拡がる人造物全て中村宏の絵に塗られけり

中村宏個展寸描

東京 林 宏 匡

一面に血の湧き出づる「血井」てふ画は赤裸々に赤の一種
犯罪の湧き出づるその源を揶揄せることき灰と黒の画
あでやかな色彩全て封じ込む黒き画念の中村宏
一眼の画風変へざる一徹さ客員教授の中村宏
老いてなほ中村宏のその画風若かりしどきと変らざらめやも

表紙の言葉

練馬区 萩野 公嗣

『静 物』 P10 油彩

インターネットで Daniel Keys という若手のアメリカの画家を見つけた。小説家の Daniel Keyes ではない。アラブリマで描く彼の作品があまりにすばらしいので、まねをしたというのが本音である。彼のブログによれば、暗部には筆のひっかいた跡が下地を通して見える scratchy なタッチが好きだという。たしかに油絵具の深みとともに透明感と動きが出せる。溶き油にはダンマルワニスを使うそうだが、私は普通のペインティングオイルを使った。ペインティングオイルも壺にいれておくと粘っこくなる。キャンバスは、パサパサしたものよりスムーズな表面のほうが描きやすい。というわけで scratchy な感じがおわかりいただければ幸いです。

(第 62 回 医家美術展出展作品)

＝詩＝

青森 秋元光博

輪廻転生

幻聴のような死の彼方の声
聞くこともできない空の耳
あたな方には死はなく
死という言葉もなく
死を解せない永久の流れ者

桜花の咲きすさぶるころには姿も見せず

美しく散るすべも知らない不幸な耳

何を聞いてにやけているのか

哀しい事実だけが淀んでいる濁世に

先をさえぎっている雲の輩よ

確と聞いてその耳を疑うな

すでにこの地上は

貧富の落差で傾き

鳥たちも啼き声を放ちながら
空を迷つてゐる

太宰治の地へ

松島（マヅシマ）村から五所川原サ
町賈（マジゲ）に来た戻りの馬櫂さ
父ちやど乗へでもらた

チリンチャリンて馬（マ）コ馳（ハ）ければ
吹（フギ）だまりの流れサドシンと落（オ）じで
櫂サ頭（アダメ）コぶつける

藪へ四ツの我（ワ）サ

泣ぐな 泣がねで母ちや待てるべ

父ちやの大（オ）き手でナヅギさ涎（ヨダレ）コつけでける

病氣で寒家（イ）さ戻てら母ちやさ云ひに行ぐヨ

——オラばだまつて抱っこしてくれだ
そいがらニコつて笑てけだ

母ちや水（ミツ）コ飲見てエなアつて

我 積てら雪コ サラッととろけで

下の雪コ 一（ヲト）つかみ前垂（メダリ）さ
かぐして一の！

「メイぢや メイなア」て

雪コ食（カ）へで良（イ）がつたなアて

雪

降る雪の数をかぞえる

自己主張しながら近くに舞い降りる雪

遠くで誰にも気づかれないように

ひつそり着地する雪

子供だった頃
スキー やソリ

雪合戦や雪だるま
かまくら作り

無我夢中で雪の中を駆けまわっていた

父がいて

母がいて

姉がいて

弟がいて

想い出の雪の数は尽きることはない

その無数のかたちを脳裏に刻みつけながら

これからも生き続ける

それぞれが違ったかたちをしている
想い出をかぞえるように雪をかぞえてみる
その無数の記憶の断片も

遠くに近くに

それぞれのかたちで舞っている

降る雪の数をかぞえる
ゆきのかたちは現在進行形

時には吹雪となる哀しみ

牡丹雪となる恋

粉雪となる家族の絆

記憶の中では絶え間なく降り続くそれらの雪は

時にはぬくもりがあつたり

時には心の芯まで凍りつかせる

フェレンツ・フリツチヤイの苦悩

音楽評論

(ブラームス交響曲第1番ハ短調)

み
やま
みち
ひと
海
山
道
人

偏歴の始まり

○大学のU先生が、「カール・ベームの指揮するブラームスの交響曲第1番が好きだ」と言われた時から、僕のブラームスの交響曲の偏歴の旅が始まった。1959年録音のベームの1番が素晴らしいことは重々承知していたが、その言葉を聞いた瞬間、ブルーノ・ワルター指揮コロンビア交響楽団の4番におぼれ、ほとんど毎日3回も4回も聴いていた17歳のときの僕に、瞬時に戻つてしまつたのだ。

枯淡の境地の寂寥感あふれるこの演奏は、当時の僕に人間としてのあり方を示したものとして理想だった。50年近くの年月が過ぎた今になつて聴きなおしてみると、今の僕は枯淡の境地を好まず、戦闘的で、死して後やま

ん、というような演奏を欲するようになつていたのだつた。

これは軽い驚きだつた。年月が人に及ぼす影響は大きい。

それに気づいた僕は、これまで聴いてきた録音を全て聴きなおそうと思い、4つの交響曲のCDを引っ張り出してきて何度も聴いた。それだけでは済まず、インターネットで注目したCDを購入し、上京した時に、御茶ノ水の「ディスク・ユニオン」に立ち寄つては山のようにCDを買い込んだ。そしてそれを1枚1枚聴いていったのであるが、聴いている途中でも好みが変わつてしまつことがあり、自分の心の変化を楽しんでいるうちに、このエッセイを書こうという気になつた。

フェレンツ・フリツチヤイの

ブラームス交響曲第1番

1956年2月8日、ジュネーブのヴィクトリア・ホールでの演奏会のプログラムは、バルトークの「ディヴェルティメント」、リストの「ピアノ協奏曲第2番」(ピアノはアルド・チツコリーニ)、そしてブラームスの「交



BÉLA BARTÓK
DIVERTIMENTO
FRANZ LISZT
PIANO CONCERTO NO.2
JOHANNES BRAHMS
SYMPHONY NO.1

ALDO CICCOLINI
ORCHESTRE DE LA SUISSE RIOMANDE
FERENC FRICSAY
(1956/2/8 Genève)

ETERNITIES

ETCD-201/2-M

イである。

スイス・ロマンド管弦楽団は、エルネスト・アンセルメによつて1918年に創設されたオーケストラで、当時もアンセルメの統率下にあり、素晴らしい録音によつて世界中に知られていた。客演も多く、カール・シューリヒト、ウイルヘルム・フルトヴェングラー、ハンス・クナッパーツブッシュなどの演奏会が人気を呼んでいた。バルトーク、リストと進行した演奏会は、最後のグラームスの交響曲第1番を残すのみとなつた。

曲が始まつた。

第1楽章冒頭は緊張感にあふれ、気迫をみなぎらせて前へ前へと進んでいく。ものすごい推進力だ。高い理想と妥協しない意思。若々しく、生き生きとしているのみならず、颯爽として希望に満ちた演奏である。

この第1楽章を聴いただけで、彼がいかに素晴らしい指揮者であつたかがわかる。

このとき、フリツチャイ42歳。壮年期に差しかかったばかりで、前途は洋々としていた。

ブルーノ・ワルターは、この頃の彼について次のように語つてゐる。

「フェレンツ・フリツチャイは、謙虚の美德を備えた数

オーケストラはスイス・ロマンド管弦楽団、指揮は、この楽團にとつて初登場となるフェレンツ・フリツチャ

イ曲第1番」であつた。

「フェレンツ・フリツチャイは、謙虚の美德を備えた数

少ない若い指揮者のひとりです」

彼の演奏は、どれも生命力に満ちているが、もう一つ重要な特徴がある。それは、どの演奏からも真心と誠実さが感じられるということである。そして、常に「希望」がある。

フリツチャイは1954年にイスラエルに客演し、ヴエルディの「レクイエム」を演奏した。この演奏会は、結果的には大成功をおさめるのであるが、彼は、当時全く練習の出来ていなかつた合唱団員に向かつて次のように言つたといふ。

「あなた方は、私が意図するように歌わなければならぬ。私だっていつも人の言いつけに従順であるうと思つてゐるので。なんなら、家内にたずねてみてください」

そこにいた人は、きっと噴き出したであらう。

これは受けを狙つての発言ではない。けれども、この言葉の中には深い意味がある。

フリツチャイには、どのような曲であつても、こうであるべきであるという形がはつきり見えていたはずであり、そのためには、オーケストラや合唱団のメンバーはこのように演奏しなければならない、という信念があつ

たはずである。

上記の言葉は、それを実現するにあたつて、自分の中に明確に見えていいる形を合唱団のメンバーに伝えようとしたに過ぎないのであつて、強圧的に自分に従わせようと言う意図は、全くなかつたはずである。

キビキビとした演奏は、トスカニーニにやや似るが、その本質は全く異なつてゐるといふことが、この言葉から理解できよう。もちろんその演奏からも……。 ブラームスに戻ろう。

第2楽章は美しく、叙情的で、途中から入つてくるバイオリン独奏は緊張感にあふれている。

多分この演奏はコンサートマスターと思われる。名前は分からぬ。1946年までスイス・ロマンド管弦楽団のコンサートマスターをつとめたミシェル・シユヴァルベは、その後フリーに転じたが、1957年にカラヤンに請われてベルリンフィルのコンサートマスターに就任するまで、スイス・ロマンドとは密接な関係を保つていた。しかし、バイオリニストでもあるK先生に聞いてみたところ、どうもこのソロは彼ではなくそらだということがだつた。

第3楽章も誠実に、丁寧に演奏され、美しい。

第4楽章も、奇をてらつたところはなく、正面を向いて堂々と演奏していく。有名な第4楽章の第1主題の「暗黒から光明へ」というテーマも、「こしさらに強調する」とはない。良く聴くと、英雄的な表現ではなく、「やさしさ」に満ちた歌であるのが分かる。この楽章全体を見れば、やはり淫刺として自由な気風にあふれる気品の高い演奏であり、フィナーレは高揚感に満ち、緩急の幅が大きくなり、次第に遅くなつていくテンポと相俟つて、極めて劇的である。

最後の一音が鳴り終わつた途端、間髪をいれず拍手が沸き起つて、賞賛の歓声が贈られている。当時のヨーロッパの演奏会では、通常、曲が終わつてから数秒たつてから拍手が始まるのが一般的だつたから、このジュネーブの聴衆の熱狂振りは異常といえるだろう。それだけ、彼の演奏が素晴らしかつたと言つことの証左である。

再びフリツチヤイのブラームス交響曲第1番

この演奏のほぼ2年後（1958年）の2月2日と3日に、フリツチヤイは、ハンブルグのムジークハレで、北ドイツ放送交響楽団の客演指揮者として、ブラームス

の「交響曲第1番」を演奏している。

曲目は、2年前と同じようにバルトークの「ディヴィュルティメント」で始まり、今回はリストではなくコダイの「ガランタ舞曲」と続き、そして最後がブラームスの「交響曲第1番」であつた。

幸運にもこのブラームスの「交響曲第1番」は録音されていた。

そのCDを入手し、期待に胸を膨らませ、音響装置をオンにして音楽をスタートさせた僕は、そのあまりにも苦悩に満ちた表現に驚愕した。

冒頭のティンパニーの連打からして苦悩に満ちている。2年前の、明るく希望にあふれ、淫刺と演奏していたフリツチヤイは一体どこに行つてしまつたのであろう。 ブラームスは、この交響曲の第1楽章の冒頭をどのように開始すべきかを、悩みに悩んだかもしれない。結果、ティンパニーの連打と低弦を中心とした重厚な表現を選んだ。この部分は、ブラームスの苦悩の表れなのだろうか。

フリツチヤイは、そんなことを考えて、この部分をこのように苦悩に満ちた表現にしたのであろうか。 そうではないような気がする。

もしそうならば、2年前の演奏にすでに同じ表現がとられていたはずである。しかし、その形跡は全く見られない。

この苦悩は、全曲を通して一貫している。顕著に現れているのは、第1楽章半ばの部分である。苦悩はその極みに達し、もはや崩壊寸前であるかのようである。満身創痍になりながら、なおかつ全力を振りしぶって血路を開き、前へ前へと突き進む古武士のようなフリツチャヤイ。

希望と絶望の狭間にあつて苦悩するフリツチャヤイ。僕は深く感動し、しかし、そのあまりの変貌ぶりに茫然としてこの録音を聴いていた。一つ一つの音の深さが、2年前の演奏とはまるで違う。この音は常識を超えていいる。全楽章を通じてこのように鳴っているのだ。

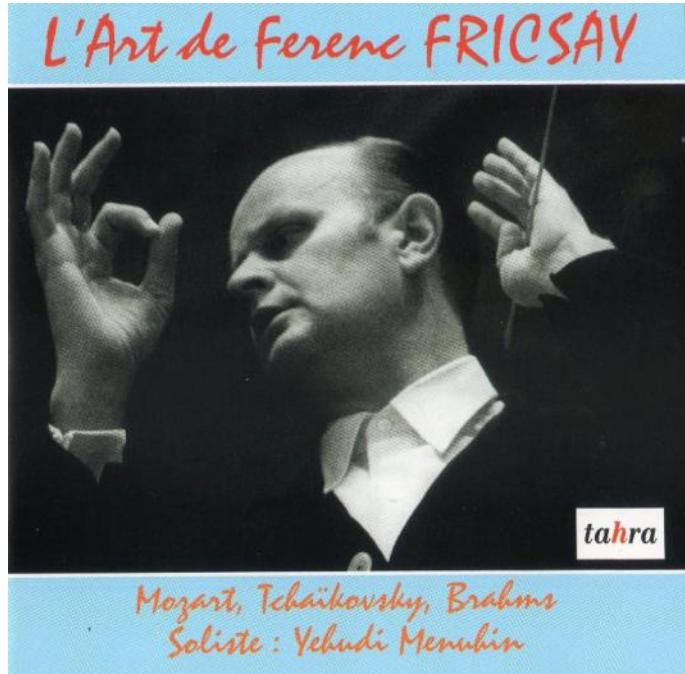
曲は進む。

苦悩で始まつた第1楽章は、その苦悩を収束するように、テンポを落とし、一つ一つ丁寧にしまいこむようにして終わる。

沈痛な表情で開始される第2楽章。この楽章は、確かに苦悩の表情は見られるものの、深い音、ゆったりとしたテンポ、美しいヴァイオリンソロなど、心休まるひと

時である。これが、束の間のやすらぎなのかどうか…、しかし、この時間は、何物にも代えがたいと思う。

第3楽章は思索的に始まり、思索し続け、思索しながら終わる。この思索は、次の楽章につながつて行く。



第4楽章は、ふたたび苦悩に満ちた深い音で始まる。

第1主題は、誠実に、本当に誠実に演奏されていると思う。カラヤンのような華麗さもなく、バームのように謹厳でもなく、ミュンシュのようにきらびやかでもなく、メンゲルベルクのように大向こうを狙うでもなく、ただ誠実に音楽を進めていくフリツチヤイ。ここで彼は禁欲的であるかのようである。そこに、彼の万感の思いを聞き取るのは僕一人だけであろうか。

この楽章の最後の方で、もう一度苦悩が最高潮に達して爆発してしまうところがある。そのあとのクララのテーマが、散つてしまつた音を拾い集めるようにして再び形が復活し、次いでクライマックスに入つていく。曲が終わりに近づくにつれて緩急の幅は大きくなり、テンポはだんだん遅くなる。しかしそれは2年前の演奏の比ではない。

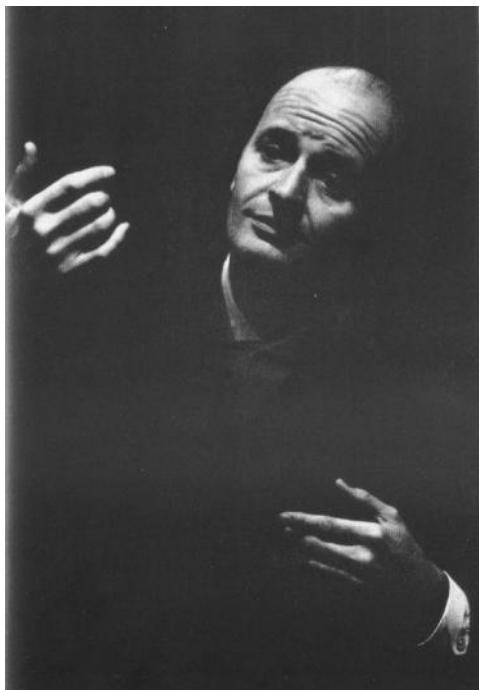
韋駄天が天空を翔けていくようなティンパニーの強奏のあと、演奏は息つくひまもなく終盤へと突入していく。そして、最後の一音は、通常の3倍ほどの空白の時間の後、響き渡る。

彼は、この演奏が終わらなければ良いと願つていたのではないか。このまま終わらなければ、至福の時間は永

遠に続くのに・・・。そう思つていたのではないか。

曲が終わつてからの拍手は録音されていない。しかし、この演奏の後、すぐに拍手しようと思つる人はいなかつたであろう。それほどに、この演奏は重く深いものであつた。

それにしても、北ドイツ放響のメンバーは、自分たちが世紀の名演奏をなしとげたのだということに、果たして気がついていたのだろうか。



フリツチヤイの苦惱はどこから来たのか

この第1番が苦惱に満ちてしているのはなぜだろう。

僕は、押しつぶされそうな苦惱の中になりながら、なつかつ彼が希望を棄てていなさいことに興味を持った。この演奏は、どんなに苦惱に満ちていても希望が感じられる。聴く人に深い感銘を与えるのは、それゆえではないか。

2年前の演奏は希望に満ちたものであった。

その演奏と、2年後のこの苦惱に満ちた演奏との間に、フリツチヤイに何が起こったのだろうか。

この2つの演奏を聞き比べてみると、1956年の演奏がトスカニーニ的であるのに対し、1958年の演奏は限りなくフルトヴェングラーに近い、と言えるかもしれない。ただ、前者の演奏は、トスカニーニのように楽員と聴衆に自分の音楽を強制して出来たものではないし、後者の演奏も、人間的な歓びを表したというより、苦惱の中に希望を見出そうと努力する姿が感動を与えていている部分が少なからずあると思う。

多くの解説書は、フリツチヤイの演奏が晩年になつて大きく変わったと書いている。それは大病に罹患したた

めであるとも書いている。その病気とは「白血病」であったといわれる。確かに、1959年から1961年の短い間の貴重な録音には、それまでにない重厚さと深い思索と大きなスケールが感じられる。彼の病気は果たして白血病であったのだろうか。

フリツチヤイの病気

フリツチヤイの病跡について、日本語の文献では、白血病であったとも、何回も手術を受けたとも書いてあるが、真相に触れたものはない。

それで、ドイツ語のウイキペディアを調べてみた。
2箇所に記述があった。翻訳して記載する。

※

※

※

最初の病気の発現と一時的な回復

1958年の11月末、フリツチヤイは胃癌と診断され、同じ月のうちにチューリッヒで手術を受け、2回目の手術が翌年の1月に行われた。1959年9月まで、何か月にもわたる休養期間が続いた。

病気の再発と死

ロンドンにおけるいくつもの客演の後、フリツチャイは1961年12月に再び重い病気にかかり、引き続いて手術を受けた。1961年12月7日、フリツチャイは生涯最後のコンサートを行つた。彼は全ての約束を取りやめた。1962年の夏、この病気の局面はまるで良くなつたかのようで、乗り越えられたかのように見えた。

この年に、かれは「モーツアルトとバルトークについて」と題した本を著述した。その中で、彼はクラシック音楽一般についての基本的な見解を述べ、タイトルの中で特別な名を付した作曲家の音楽について詳述している。

フリツチャイは、1963年2月に、胆嚢穿孔の結果、バーゼルで48歳の若さで亡くなった。そして、エマルティンゲンの墓地に埋葬された。

* * *

ドイツ語のウイキペディアの記載は以上である。

これで見ると、胃癌と診断されて手術を受けたのは1958年11月で、2カ月もたたないうちに2度目の手術を受けている。

僕がCDで聴いた2回目のブラームスの演奏は、その年の2月の演奏会のものであるから、手術の10ヶ月前である。すると、彼はこの2年間の間に病気ではない何か

があつて、これほど大きく変貌したのだろうか。腑に落ちない僕は、さらに細かく年表を見た。

1957年のいつかは分からぬが、この年にミュンヘンで「重篤な病気」にかかり、ヒンデミットの交響曲『世界の調和』の初演を作曲者に返上した、とある。

この病気が何であるかは分からぬ。翌年の手術につながるものかも知れない。

だいたい、白血病という病名はどこから出てきたのであろう。不思議である。

更に、ゼンタ・マウリナ（1897～1978・ラトヴィア出身の作家は、「フリツチャイ追悼文集」の中で、次のように書いている。

「最初の胃の手術を彼は十七歳の時に受けっていましたが、二度目のものは一九五八年の十一月に、三度目の中のは一九五九年に行われ六時間越えるものとなりました。一九六二年の一月からは腫瘍の手術を伴う大いなる苦難の時期が始まります。十回に及ぶ手術をもつとしてても、彼を死から救い出すことはかないませんでした」。

この話を、U先生とO先生にしたところ、「一人とも即座に、「それは悪性リンパ腫ではないだろうか」と言つた。

一般的に、白血病と悪性リンパ腫は間違われやすい。

胃原発の悪性リンパ腫の場合、胃癌と混同されやすい。

いろいろな話を総合すると、フリツチャイは悪性リンパ腫に罹患し、この病気と格闘しながら、人類の宝とも言える一群の録音を残したのではないか。

1957年の、年表にはほんの小さく書かれているに過ぎない「重篤な病気」こそ、悪性リンパ腫の始まりだったのではないか。

このときに、死の予感に襲われた彼は、自分の人生について深く考えたのではないだろうか。エーリッヒ・ケストナー（1899～1974・『飛ぶ教室』の作者）は、フリツチャイの死後、次のように書いている。

「フリツチャイはキュビリエ劇場で指揮したとき、既に外科医からの所見を聞いていたのです。」

ミュンヘンのキュビリエ劇場が再建されたときの最初のコンサート（ライガロの結婚）は、1958年6月14日である。従つて、彼は最初の手術の何ヶ月も前に自分の病気が何であるかを知つていたことになる。

おそらく、1957年の「重篤な疾患」の時に、自分の余命が限られたものであることを聞いていたのである

う。

☆

☆

☆

フリツチャイは、1960年12月5日のヘルツフェルトへの手紙に、こう記している。

「病気を得たものの、またそこから回復する」ことができたことについて、神と運命に感謝しています。このことを生涯忘れまいと思います。なぜならば、このような試練を乗り越えたことは、人生におけるたんなる一場面ではなく、神による勲章のようなものであると信じるからです。私は病床で心の底から願いました。できるものならもう一度生きたい、健康になりたい、と。

その後

フエレンツ・フリツチャイは、1962年2月20日に48歳で亡くなつた。そのあまりにも若すぎる死は皆に衝撃を与え、フィッシャー＝ディスカウは、「フエレンツ・フリツチャイ協会」を設立して、彼の業績を讃え、後世に伝えようとした。名誉会長にはカール・ベームが就任した。

彼の死の翌月（3月）、ベルリン放送交響楽団による追

悼コンサートでは、同じ1914年生まれのラファエル・クーベリックが指揮台に立つた。

付記

この小さなエッセイを書くに際し、アルフアベータブツクス発行の『伝説の指揮者・フェレンツ・フリツチヤイ』を大変参考にさせていただいた。

この本は、1961年10月29日のユーデイ・ミニユ

一インの序文と1962年1月15日のエリック・ウェルバのあとがきに挟まれた『モーツアルトとバルトーク』と題されたフリツ・チャイ自身の小論と、親しかつた友人フリードリッヒ・ヘルツフェルトが編集した追悼文集を、野口剛夫氏が翻訳し、さらに資料を付け加えて編纂・上梓されたものである。

『モーツアルトとバルトーク』は、この2人の作曲家へのフリツ・チャイの想いが強く出た名著であり、このような切り口があるとは、フリツ・チャイ以外の誰にも思つかなかつたであろう。

追悼文集は、書いている人の誰もが、フリツチヤイへの限りない愛情を抱いているのがよくわかり、時に涙を誘われる。

第三部の資料編は大脇利雄氏の録音関係のデータが、ほぼ全て収録されており、フリツチャイの演奏活動が、れだけでわかるようになっている。

A black and white portrait of a middle-aged man with receding hairline, wearing a dark suit jacket over a light-colored shirt. He is resting his chin on his right hand, which is propped under his chin, looking slightly downwards and to the side.

Ferenc Fricsay

生誕100年・没後50年を経て、本邦初のプリンチャイの本。

音楽に魂を捧げた指揮者が書き遺した、「モーツアルトとバルトーク」論
他に、自伝的エッセイ、其演者・関係者による追悼文、生涯にわたる写真、演奏、録音記録を収録。

この編の最後にあるヘルツフェルトによる年譜は、フリツチャイの病跡をたどる上で大変参考になった。この年表と、追悼文集に書かれている記載を勘案すると、フリツチャイの病気は、白血病でもなく、胃癌でもなく、U先生との先生の指摘されたとおり、悪性リンパ腫である。

つたと思われる。

謝辞

この文章を書くきっかけを与えてくださったのは、大阪大学医学部小児外科学教室の上原秀一郎先生（文中ではU先生）と、金沢大学附属病院漢方医学科の小川恵子先生（文中ではO先生）である。フリツチャイの病気がなんであつたかも、このお二人から示唆をいただいた。

また、1956年のブライムスの1番の第2楽章のバイオリン・ソロがミシェル・シュヴァルベかどうか判断に困っていた小生に示唆を与えてくださったのは、自身もバイオリニストである、刈谷市の広瀬クリニック院長・木許泉先生（文中ではK先生）である。1959年録音のカール・ベーム指揮、ベルリンフィルの演奏におけるミシェル・シュヴァルベのソロと比較していただいた。

記して3人の先生方に感謝申し上げます。

秋季号・冬季号 原稿募集のお知らせ

次号（秋季号）締め切り

平成27年8月20日（木）

次々号（冬季号）締め切り

平成27年11月19日（木）

毎号、会員のみなさまのご協力、誠にありがとうございます。

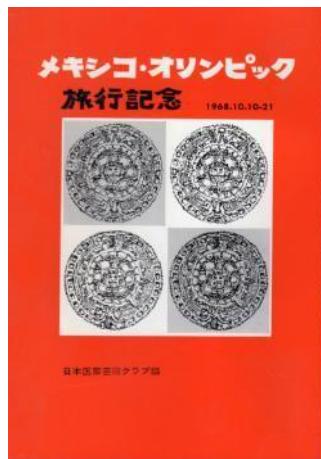
二季号分の原稿を募集させていただきます。掲載番号の指定がございましたら、その旨も原稿送付時にお知らせください。何も記載がなければ原稿到着時点での一番早い季号での掲載となります。

別送にて文芸特集号の募集もさせていただきましたので、ぜひご投稿をよろしくお願いいたします。投稿を事前にご希望される方は事務局までFAX又はメールでご一報ください。
引き続き、会員の皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。
※一部500円にて機関誌の追加購読も承っています。ご希望の方は事務局までお知らせください。

アンコール掲載

『メキシコ・オリンピック

旅行記念』②



日本医家芸術クラブ 編

リンピックだ。

当時の日本医家芸術クラブには

『旅行部』が活動していたらしく、

その旅行部がメキシコへオリンピッ

クを見に行つたときの旅行記が発行

されている。25家庭33名の方がこのオリンピック旅行に参加されてい

る。2名の添乗員が付き添い13泊

15日で、サンフランシスコ、サンア

トニオ、メキシコシティ、クエルナ

バカ、アカプルコ、ロスアンゼルス、

ホノルルと7都市を旅している。

旅行された方のうち、11名の方が

この旅行記をご投稿されているので、

その旅行記を順次ご紹介していきた

い。尚、本文は原文のまま、掲載写

真は印刷されたものをスキャンした

ものなので、画質の悪さはご容赦願

いたい。

一九六八(昭和43)年十月十一日、第十九回メキシコオリンピックが開幕した。東京オリンピックが一九六四(昭和39)年十月に第十八回として開催したので、東京の次の夏の才



【旅行日程表】

一九六八(昭和43)年10月

10日 東京発

サンフランシスコ着

東京国際空港より大型ジエット機にて出発、一路サンフランシ

スコへ

到着後、ホテルにて休息

午後、サンフランシスコ見学、マーケット通り、官庁街、ツイ

ンピータス、金門公園、金門橋、

漁夫の波止場、チャイナタウン

11日 サンフランシスコ発

サンアントニオ着

メキシコシティ着

サンフランシスコよりメキシコシティへ、途中サンアントニオ

市見学

12日 メキシコシティ

第19回メキシコオリンピック

開会式に出席(午後一時～五時)

13日 メキシコンティ

午前・メキシコ市見学、チャップルテペツク公園、ゾカロ広場
中央政府、大寺院、国立人類學博物館等

午後・オリンピック陸上競技見学

14日 メキシコンティ

午前・ティティワカンの太陽の神殿、ピラミッド見学
午後・オリンピック重量あげ見学

15日 メキシコンティ

午前・オリンピックバレーボール見学
午後・オリンピック陸上競技見

16日 メキシコンティ クエルナバカ着

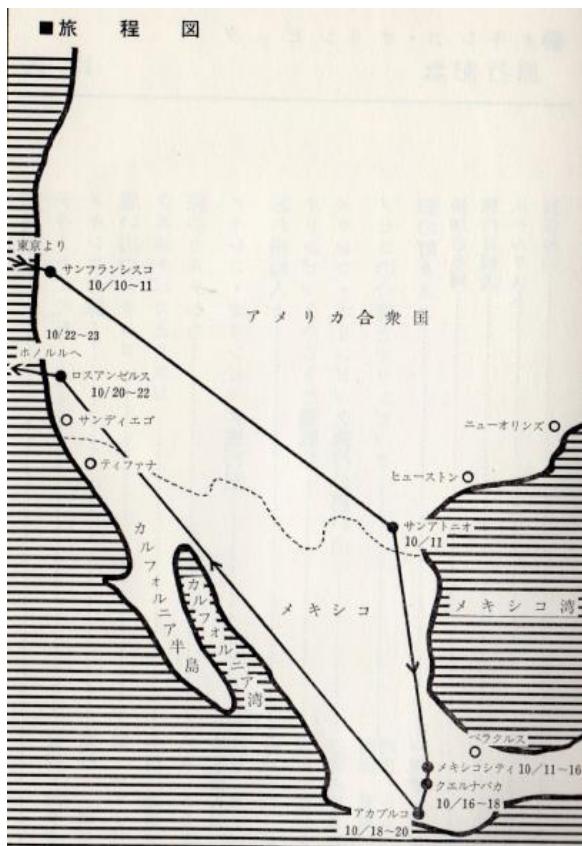
午前・オリンピックバレーボール見学
午後・オリンピック陸上競技見

17日 クエルナバカ

メキシコシティより、クエルナバカ経由にてアカプルコへの3日間のバス旅行
クエルナバカ見学、夜はメキシコ政府主催のオリンピックパーティ

18日 クエルナバカ着 アカプルコ着

テイに出席
クエルナバカよりアカプルコへボートにてアカプルコ湾巡航、メキシコシティ10/11-16
クエルナバカ10/16-18



夜はラ・ケブラダの崖上からの
ダイビングショウ見学

20日 アカブルコ発

ロスアンゼルス着

オリンピックヨットレースを見
学、午後の便にてロスアンゼル
スへ向かう

21日 ロスアンゼルス

ロスアンゼルス見学、ハリウッ
ド、ビーバリーヒルファマーズ、
マーケット、チャイニーズ劇場、
オルベラ街等

22日 ロスアンゼルス発

ホノルル着

ホノルル着後、オアフ島見学、
ワイキキビーチ、ダイヤモンド
ヘッド、ハワイ大学、パンチボ
ールの丘、真珠湾、ヌアヌパリ
等

23日 ホノルル発

パンアメリカン大型ジェット機

にて一路東京へ

東京国際空港着後解散

24日 東京着

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

オリンピックやじきた観戦記

岡野 岳郎

何でも見てやろうという野次馬根
性は、病こうもうに達し、遂に日本
を脱出して裏側に当るメキシコまで
足をのばすことになった。

編集委員の尾松氏と私は医家芸術
クラブの会員として十月十日、未だ
見ぬ異国への不安と期待に胸をおど
らせ多数の見送りを受けて、午後三
時パンアメリカンの大型ジェット機
のタラップを上つた。

一行のメンバーは北は北海道から
西は大阪までの有名無名の先生方と、
家族、並びに添乗員を合せて三八名
の応援団を組織、平均年令は五五才
だが、二〇代の若者のように元気。
それに比べれば我々弥次喜多コンビ
は一番年が若く子供みたいなもので
ある。又全科がそろっているので万
一病気になつても心強い。精神科の
先生が一番多いので、我我頭の弱い
者にとつては有難いことだ。

当日は曇空で少し蒸し暑かつたが、
一気に上昇して雲海を突きるとそこ
は、太陽が燐々と輝くブルースカイ、
薄暗かつた機内はぱッと明るくなつ
た。機内は静かで快適、椅子の坐り
心地に慣れた頃には、未だ五時だと
いうのに外は暗くなつて來た。夕飯
に当る機内食に舌づみを打ち、う
とうとするうちに空がしらみかけ、
太陽が薄日をのぞかせる。時計が午
後十一時をさした頃、何時もならそ



オリンピック競技場にて
岡野岳郎（左）と尾松謙のやじきたコンビ

ろそろ寝る時間にもう夜明けで、変な具合だ。始めてみるアメリカ大陸の輪かくが朝焼けの中に、くつきりと見えだしたのが印象的であった。午前零時（アメリカ時間の午前八時）はじめてアメリカ大陸のシスコ空港に第一歩を印した。しかし時差の関係で今日も十月十日である。

シェラトンパレスホテルと言う十階建てのクラシックなホテルで旅装

を解き、半日間、貸切バスで市内観光、金門橋はあいにくガスに包まれていたが、雄大である。又ヒッピー族が各所で見られ、さすが発生の地だと感心する。夜はチャイナタウンの中華料理店で宴会、今日は中国の双十節に当るとかで賑やか。夜霧にぬれたシスコの町も又旅情豊かなり。日本の五月位の気候だろうか。異国

のホテルでの一夜は疲れたせいもあってぐっすり夢路をむさぼつた。も

つと詳しくエピソードをのせたかつたのですが、今回はメキシコにしぶる為割愛します。残念。

十月十一日（晴）
シスコの空港を午前十一時頃我々を乗せたアメリカン航空は、銀翼を光らせて、一路テキサスのサンアントニオ空港まで一飛び。ここで旅券に出国のスタンプをもらい、一

時間休憩、四時にメキシカン航空に乗り換え、アメリカ大陸に別れを告げた。七二七型のジェット機だが少しガタがきている様な感じ。しかしスチュワーデスのセニヨリータが日本人そつくりの可愛子ちゃん、尾松のユウちゃん持参の舞妓のハンカチのプレゼントで俄然サービスが良くなり、未だ見ぬメキシコに夢は大きくなり、ふくらみ、皆元気いっぱい笑声の絶え間がない。

客のほとんどがオリンピックの観光客らしい。途中給油と税関の為グアダラハラ（メキシコ第二の都市）に着陸、女の税関吏が愛想よく「ウエルカム」と申し訳に荷物をチェックしただけ。いよいよ三十分でメキシコ空港だ。予定より一時間位遅れて午後八時頃メキシコ市の灯が見えはじめた。その時機内の電気が急に消えて、アナウンスで夜景のすばら

しさを説明しだした。澄んだ大氣の中で真珠をちらりばめた様な夜景は百万ドル以上、筆舌には言いつくされない様な美しさで、広々としたシティーを埋め尽し、きらめく星座そのものである。道が広く真直で地盤の関係か高層建築が少く、螢光灯やネオンの少いこの町は明りが統一されている為かも知れない。何はともあれ見とれているうちに八時過ぎ無事空港に着き、可愛子ちゃんがSAY ONARAと振る手に別れを告げ、迎えのバスに分乗し、ホテルに向つた。

そのホテルの名はメキシコ流に読めば（ホテル ジュネーブ）オтельヘネベー。時間が遅いので近所のレストランへ食事に行く。ハポンの団体が来たので食堂側は大喜び、早速メキシコ料理に舌づみを打つが、アメリカ並みに万事大味、ウエイト

レスのセニヨリータと並んで写真をパチリ。五円玉の効果が現れる。穴あき銭は大変めずらしいらしい。ハボネスディイネロ（日本のお金）（日本のお金）と大喜び。さらつとして暑くもなく寒くもなく気持がいい。

町は前夜祭でどこなく浮々した感じ。明日に控えてバスルームで洗濯。暑くも寒くも気持がいい。十一時頃、日の丸の小旗を支給され、町は前夜祭でどこなく浮々した感じ。明日に控えてバスルームで洗濯。暑くも寒くも気持がいい。

十時頃、日没の丸の小旗を支給され、十一時から開催されるオリエンピックスタジアムに出発。

ホタルからレフオルマ通りの独立記念塔近くのターミナルから出る専用バス乗り場まで五分程歩くが、皆の目が好意にあふれて「ハポン、ハポン」と祝福してくれるのがうれしい。

るのに圧倒される。メロン、マンゴ、パパイヤ、グレープジュース等どれをたべてもおいしい果物だけでお腹がいっぱい。

十時頃、日没の丸の小旗を支給され、暑くも寒くも気持がいい。十一時頃、日没の丸の小旗を支給され、町は前夜祭でどこなく浮々した感じ。明日に控えてバスルームで洗濯。暑くも寒くも気持がいい。

十時頃、日没の丸の小旗を支給され、十一時から開催されるオリエンピックスタジアムに出発。

ホタルからレフオルマ通りの独立記念塔近くのターミナルから出る専用バス乗り場まで五分程歩くが、皆の目が好意にあふれて「ハポン、ハポン」と祝福してくれるのがうれしい。

開会式

十月十二日（暁後晴）

御機嫌うるわしくお目ざめ。食堂で朝食、皆あらためた顔でメキシコ並に朝からモリモリ食べる。セニヨリータの愛想がいいのですくわれる。果物がおいしい。ボリウムがあ

専用バスは国際色豊か、市内を二十分程走つて会場近くまで来たが、車の洪水で進めず降りてマーン・スタジアムまで車の間を縫つて歩く。競技場正面入口の上はオリンピックを表現する力強い壁画で蔽われている。指定席に着いた時は、開会式の始まる十分前であった。

前から二列目で場所としては特等席。メキンコが自慢するだけのことはあって、サラダ皿に似て平たく大きく開いた「オリンピックスタジアム」は万国旗にふちどられて上縁し、ゆるい波形を描いているのはお国柄の帽子ソンブレロをかたちどつたものだそうだ。今ソンブレロの中に、世界がすっぽり納まつた。昼近くまで雲が多かつた空模様も次第に晴れ上り、ギリシャを先頭に、選手団の人場行進がはじまつたところから、南国特有のきらめく太陽がスタジアムいっぱいにふりそいだ。

先生方はテレビで入場式の模様をつぶさに御覧になつたことと存じます。日の当りに見る我々は、その感激や、はかり知れないものがある。遠藤選手の揚げる日の丸を先頭に、緋色のユニホームを着た日本選手団は、六二番目に入場した。我々は夢

中で日の丸の小旗を振り続けた。スタンド、八万の群衆の熱狂振りについては、改めていうまでもない。一段と熱狂したのは、ミニスカートの女子選手が入場の際だつた。美人国、フランスやイタリアチームがやってくると、人々は総立ち、前列が背延びするから、その後は、シートの上によじ登る。歓声、口笛、拍手、その後は、もう気が気ではない。「シェンタス、シェンタス（すわれ、すわれ）」と大声でじなる。一応はすわつても、女性旗手でも現われようものなら、もういけない。だからといつぱいにふりそいだ。

先生方はテレビで入場式の模様をつぶさに御覧になつたことと存じます。日の当りに見る我々は、その感激や、はかり知れないものがある。

てきたソ連チームだつたが、こちらには反応が冷たい。チエコに対するのとは対照的である。アオザイの女性選手を先頭にしたベトナムには、ビーバー（万才ビーバー・ベトナム、国際感覚もまた充分である。

日本チームには「アミーゴ」（友だち）の呼びかけ、「ハポンハポン、ラララ」前開催国への親近感と、東洋の大國ハポンへの憧れか、小旗を打ちふる我々には涙が出る程うれしかった。途中で気がついたが、旗持参加で応援に来ているのは、一五二カ国参加の中で日本とメシキコだけの様だ。

最後に、「サクラ、サクラ」のBGMの中で振袖姿の日本娘と民族衣装のセニヨーネの出合いは演出の効果満点で素晴らしかつた。

あけっぴろげで、卒直で底抜けで陽気な開会式。ラテンアメリカに初

めてやつて来たオリンピックはだれが何と云おうが、完全に「ファイエスタ」(祭)である。暑いが汗をかかない。多分湿度が低いせいだろうか、紫外線がジリジリ皮膚に滲透していく様である。興奮さめやらぬ中に場外に出れば、我々一行はメキシコの群集にとりかこまれ、「アミーゴ(友だち)、バッヂのチェンジ、コインのチェンジ、旗をくれ」はてはサイン帳を持つて追いかけてくる。うれしい悲鳴をあげてバスに乗り込む。尾松先生は会場でとられた旗を持ってサインしてくれと来た時にはあいた口がふさがらない様だったが、しぶしぶサイン。「これこそいかれ。ポンチや」とあきらめ顔。

夜は入場式の感激を反芻して皆上気している。在留邦人に間違そられて、記者につかまつた先生、「〇〇スポーツ社」ですがと旗を振っている

ポーズをとらされた女性等皆話題がつきない。又一日間同じ釜の飯をくつたのと異国での結束力の為か、十一年の知己の如く親密さを加えていく。夜は気の合つた者同志、夜の散策に出かける。メキシコ自慢の四三階建てのラテン・アメリカン・タワーに行く。タクシーで一〇分もかからなかつたが、町の中心部の位置するのだろうか、十時を廻つてゐるのに賑やか。各国の観光団が続々と見学に来ているが、エレベーターを下りた途端、次から次へと、人なつこい目つきのメキシコ青年が寄つて来て「スペイン語が分るか」「シガリヨス(タバコ)をどうぞ」とか「ハポンは大好きだ」とか、入れかわりたちかわり来るので五分と立つていられ



メトロポリターン寺院にて

並を散歩した時、町角にタムロする青年男女はサイン、サインと追いかけてくる。全く大スターになつた様なさつかくを覚える。選手団の一員と間違えられている様な気がするのと間違えられている様な気がするのは私だけだつたろうか。

帰路、しゃれたティルームで入場

式のビデオを見る為立ち寄り今日の
感激にひたる。

居合せた客も日本選手団がうつる
と拍手してくれるので、メキシコチ
ームの時は聞き覚えで、メヒコ、ラ
ララと、一緒に手拍子をうち、夜の
更けるのを忘れ、ホテルに帰ったの
は午前二時を廻っていた。明日にひ
かえてベットに横たわる。

メキシコ編

十月十三日（日）晴

今日も快晴だ。そろそろメキシコ
ボケで今日が何日で何曜日かそれも
忘れる位だ。

水が変り、食事が変ると体の変調
を来たすのがほんとうだが、今日ま
で至極快調、家で患者や保険で追廻
されている時の方が調子が悪くよく
下痢をしたのに、こちらへ来てから
は快眠、快食、快便、二、四〇〇米

の高原だというのに食事が美味しい。

今日は年前中市内遊覧で、パラシ
オナショナールのあるソカロ広場に
と車は走った。向って大蔵省兼大統
領執務室、左手はメトロポリターン
寺院。どれも落ついた古風な十六世
紀の建物である。昔のインディオ皇
帝モクテスマ王宮跡だ。建物の一
部、大蔵省に入るとメキシコの十四
世紀以来の歴史を語る豪華なディエ
ゴリーベラによる壁画があり、さす
がに圧巻。見学が終つて外へ出ると
バラバラと絵ハガキ売りの少年が集
つて來た。そしてはつきりと日本語
で十五ペソと言う。なかなか商魂が
たくましい。スペイン語に弱い我々
はそれにまどわされて買い求める。
間もなく車はメルカードに向つた。
メルカード（市場で俗に泥棒市場と
も言われ、日曜毎に開かれる青空ガ
ラクタ市場）は日曜日なので運よく

見られた。ガイド氏より決して買わ
ない様にと注意されたが好奇心での
ぞき込む。ここでは、レフォルマ大
通りに見られる近代建築とは対照的
な厳しく貪しい一面が見られるが、
日本の闇市の様な暗さがなく雰囲気
は底抜けに明るい。マリアツチ（辻
音楽）が演奏していた。トルテリイ
ーヤ（メキシコの常食でトウモロ
コシの粉を薄焼きにしたもので日本
のお好み焼きに似ている）を焼いて
いる所を通り、どんなものか買って
みた。一ペソで二〇枚も呉れ、食べ
ると遠くで油くさく無味の物であり、
これに自分の好みの物をまいて食べ
るそうだ。

又、バスに乗る。レフォルマ大通
りは一名革命大通りとも言い、パリ
ーのシャンゼリゼを真似で作つたと
言われるだけあって道幅が広い。全
長一三キロ。五、六〇メートル毎に

ロータリーがある。西から東へカルロス四世騎馬隊、コロンブス像、クワテモック像（アステカ最後の王）、独立記念の天子像、女神の像と噴水となり、チャペルテペック公園の人口になる。道は真直ぐで広く緑地帯には熱帯樹の大木が十米おきに樹立し、舗道も日本の三倍位広いので歩きやすい。日本にもこんな道路が欲しい。

車を降り国立人類博物館に入る。ソカロ広場に近いモネダ街にある。古代アステカ、マヤ、テオティワカンのピラミッドなどの遺跡が陳列されている。巨大な石の磨をはじめ、奇怪な石像、建物の装飾、珍しい記念碑など、造形的にも藝術的にも、すぐれた出土器が多い。

博物館の建築様式や設備は、日本の博物館はどうてい足元にも及ばない程素晴らしい。

総体的にメキシコ人は建物といい、壁画といい、色彩感覚、芸術感覚がすぐれている様に思われる。二時間ではとても思う様に見られないのでも足りなかつた。全館を見るにはもう二時間位欲しいが、団体行動であるので又ホテルに戻り昼食。午後はスタジアムでの陸上競技に出かけた。入場式の時に比べると六分か七分の入りだが活氣がある。

我々の坐った位置からは、女子の走り幅飛びが一番よく見える。いよいよ待望の一万メートルの長距離に日本ホープ沢木、鈴木の出番がやつて来た。（読者は当時の新聞、テレビに詳しく知つておられる事と思う）

号砲一発満を持して走り出した。沢木、鈴木も先頭集団に交つて健闘しているが、何か気がかりだ。

「頑張れ」ありつたけの声をふりしほって声援、沢木、鈴木は聞えたのか大柄な外国選手団に交つて懸命に走つている。六周目を過ぎた頃、どうか、我々の前で突然つまずいて転びそうになり、それがけちのつきはじめ、我の声援も天に通ぜず第三集団から下位集団へと転落し、ゴールに入った時は選外だつた。がっくり肩を落す応援団。しかし沢木、鈴木はベストを尽して最後まで頑張つた。日本ではとても恥かしくて出ない様な大きな声が異国では平気で出るのも祖國愛と開放感が入り交つてゐるせいであろう。

空気が乾燥している為か無性に喉がかわき、セルベッサー（ビール）やコーラを買つては飲むと売り子は日本の競技場と同じ様な学生アルバイトだ。向い側でやつていた百米の短距離で飯島が登場していたが、惜しがれんばかりに振り続け、「頑張れ、

しかも決勝で落ちたが我々の方からはつきり見えない。尾松氏は、競技場の通路をぐるぐると歩いてこの模様を8ミリに収めてきた。

夕闇せまる頃、競技場に出れば皆メキシコ色に日焼し、少々仏頂づらで自慢の日の丸の小旗も気がひけてまるめがち、どつと掛け出された人波の為、来るバスも来るバスも満員、仕方なく通訳兼添乗員の大久保氏は、選手村に帰る空バスを交渉して一旦選手村までそのバスに乗せてもらい、選手村からあらためてホテルの近所まで乗る事になつた。十分程で選手村に着くと、警備の巡回がニコニコしながらコインやバッジを手に手にチエンジしてくれと飛んで来た。やる物がないので五円玉をやつたら、グラシャス、グラシャスと仲間にさも得意気に見せびらかしていた。日本警察では考えられないことだ。

オリンピックで賑わう目抜き通りを走るが、貧富の差が激しい。しようやなスペイン風の家が続くかと思うと、レンガに、トタンを乗せた様なスラム街がある。交通量は可成り多く市民の足はバスかウンペソタクシー。(市内の大通りは何処まで行つても一ペソで相乗りタクシー)地下鉄は二年後に完成予定であちこちで工事をやつている。アシタマニアーナの国(あしたになれば何とがなるさ)で果して期日通り出来るやら?

ホテルに帰つたが、負けた日は足が重い。頭がフラフラするので自分だけかと思つたら皆一様にそうだと言う。多分高地で空気が稀薄なせいだろう。陸上は高地族が有利だ。

一風呂浴びて夕食を食べ、塩入夫妻、山崎さん親娘と私は夜の商店街にショッピングに出かける。殆んどの店が七時に店じまいだから味けないが、昼間の暑さは何処へ、冷えびえて気持が好い。

十月十四日 (月) 晴

今日は午前中はティオティワカンの太陽の神殿ビラミッド見学の予定になつてゐる。バスはクリストファーコロンブスの記念像を過ぎて立派なインスルヘンテス道路(メキシコが独立した時の革命軍の名前)を直ぐ進んだ。途中バンコ(銀行)によつて、メキシコオリンピック記念硬貨にかえもらう。そばにメキシコ国民の總本山であるクワダルーペ寺院(メキシコは九〇%までカトリック教徒で産児制限は出来ず、子沢山の家族が多く十人位の子持は珍しくない)があり、参詣の人の波が絶えない。女子は中に入る時、必ず頭に布をかぶらなければならない、正門からガランまでは一〇〇米以上も

ボン、女はスカートや靴下が破れ血がにじむのもかまわず歩いて行くのは、ちょっと異様だが、何かうたれるものがある。

テオチワカンのピラミッドは市の北方五〇キロにある。六〇八世紀にマヤ文明と同じ頃栄えた民族の都であったが、アステカ族がこの高原を占拠した頃は、外敵に焼き払われて廃墟となつていたと。

昔は、渺茫たる湖であつたといわれる広大な平野の中に点在するシャボテンや、地酒テキーラの原料である龍舌蘭の畠を見ながら飛ばしてゆくと、はるか彼方に太陽のピラミッドが見えてくる。その左右にやや低い月のピラミッドが見える。

太陽のピラミッドは高さ六五メートル底辺二二四メートルで、エジプトの大ピラミッドに匹敵し、一〇万立方キロもあるうかと思われる大量の石や煉瓦で積み上げられ、全体を添喰で蔽い着をした跡さえある。

石段は、頭上までつづき、頂上にはかつて生贊の生きた心臓をえぐり取つて神に捧げた神殿がある。石段を登つたが高地と年のせいか息切れるがする。階段は二四四段であえぎあえぎやつと頂上に上る。頂上に立て、強い風に顎をなぶられ、果てしなく流れる雲の行方を眺めていると、過去と現実のけじめを忘却、一瞬にして滅び去つたアステカ王国のかつての繁栄に思いを馳せる。

午後はオリンピックウェイトリフティングの応援のために、大分くたびれてきた日の丸を持ってインスルハンテス劇場に向つた。映画館を改造した競技場で、やはりメキシコ特有の壁画に被われた立派な劇場である石だたみ。これをヒザで歩くのが信仰厚い人のしきたりだ。男はズ



クアダルーペ寺院

- 58 -

る。(市内の劇場は全部国立で、料金は安く、どこも立派で、どきつい看板や人目を引く物は何も置いていない)

会場に入ると煙々と映えた舞台は静かな中にも緊迫した空気が流れ、次々と逆三角に発達した筋肉美の各

国選手が現われ、水を打った様に静かな見学席に選手達の息を整える呼吸音がとユウヒュウと聞える。いよ

いよフエザー級の『小さな巨人』三宅義信選手と弟の義行選手が登場、どちらが兄か弟か分からぬ程よく似ている。我々も汗ばんだ手で応援するが、昨日の陸上競技で声をつぶしているので思う様に声が出ない。浪曲師の様なしわがれた声でどなるのだから皆の目が一せいにこつちに来る。光線の具合が三宅選手の無性ひげの顔が心なしか青白く見える。

途中、ロビーで偶然井口さんに出

会い、三宅の調子はどうですかと新聞記者の様な質問をすると、「それが昨日から兄の方が下痢をしており心配だ。弟の方は好調です」と懐しそうに話出した。「まあ頑張つて下さい。一生懸命応援しますから」と言うとつっこりして老かんとくは控室の方に戻つて行つた。次々と脱落し最後に残つた三宅兄弟はよく頑張つた。

するすると上の二本の日の丸に『君が代』が吹奏され始める。身体が電気に打たれた様にジーンとしびれ、思わず一しずくが頬に伝わるのを見えた。大和魂を目のあたりに見た感激は遠く日本を離れていただけに余計強かつた。我我一団は声をはりあげて合唱し、周囲のメキンコ人テス室内競技場、赤銅色に輝く巨大なドームだ。直径一六六メートル、高さ四三メートルあり、一九六六年十一月に着工、約二カ年の工期と九〇〇万ペソ(約二六億円)の工費がかかった。このいかにもメキシコ的な建物は、二万二三七〇人の収容人

夜は岡山先生(名古屋の外科医)と尾松氏と私の三人でレフオルマ通りへ夜の社会見学探訪に出かけた。ポンビキ氏が声をかけるがあまり高いので相手にしない? マリヤ・イスベル地下のレストランでビールを飲み、さつと引き揚げた。

メキシコシティー編

十月十五日(火) 晴

昨日のウエイトリリフティングに勝つて、皆上機嫌、元気一杯で男子バレーボールの予戦の応援に出かける。メキシコ自慢のバラシオ・デ・ポルテス室内競技場、赤銅色に輝く巨大なドームだ。直径一六六メートル、高さ四三メートルあり、一九六六年十一月に着工、約二カ年の工期と九〇〇万ペソ(約二六億円)の工費がかかった。このいかにもメキシコ的な建物は、二万二三七〇人の収容人

員と1000台の駐車場を誇っています。

会場に入ると日本対ボーランドの試合が始まつたばかりだった。見てる中に試合は白熱化し、自分がプレーしている様に熱がこもり体がこわばり手が汗ばんでくる。連日の応援で男性軍は声を枯らしているので女性軍は日頃のつましさを忘れて黄色い声をはりあげる。向い側からN H K のテレビカメラが盛んに実況放送をしている。日本のカメラマンが写していると思うと心強い。

上の放送席にもぐりこみ本物のカメラマンにまじって8ミリカメラで決定的瞬間を収める。少年に感謝をこめてムラチャス・グラシアスとくり返す。親日的なのか？こちらの強引さに負けたのか？前者としておこう。試合は一方的に日本の勝ち。晴ればれした顔で日の丸の旗を肩にのせ意氣様々と表に出て記念撮影。選手団のバスにバンザイの連呼をあびせるが、何だか選手団はてれくさい様な顔をして日本人的スマイルを浮べるだけである。

ホテルに帰つて昼食、午後は又陸上競技の応援だ。小休止して三時から応援に出掛けた矢先、一天にわざにかき曇りザアという音と同時にスコールが降り出した。少し止んだ所でバス停まで出掛けたが、又降り出したので、中止となり、ホテルに帰り荷物の整理をして、夕方まで昼

寝を決めこんだ。六時頃在留邦人に來た。当地の日本語学校の校長をしている人で在留一〇年、スペイン語もペラペラである。市郊外にある海老沢氏の家まで二〇分程度で着いたここはスペイン風の家が建ち並ぶ高级住宅街である。家に招じられると奥さん以下子供さんが嬉しそうに出迎え、故郷の話、メキシコの話と話題がつきぬままに久しうりで御飯に味噌汁、漬物と日本の匂いをかぎながら夕飯を御馳走になり、なごりがつきぬままホテルまで送つてもらつた。間もなく、メキシコ大学歯学部で口腔診断学の教授をしている日系メキシコ人のドクター田中氏が、奥様（日本人）同伴で面会に來た。これも尾松氏の知人である。連れだつて近所のレストランに行きビールで乾杯、夜のふけるまで語り合つた。

現在歯学部の学生は二千名で、診療器具は、米、独、イス、日本と先進国から輸入しているが、日本製の評判は良い様である。明日は歯学部を是非見学してくれと言わされたが、団体行動のため辞退してなまこりのつきぬ間に別れた。

今夜もよく眠れそうだ。

クエルナバカ編

十月十六日

メキシコ市に別れを告げて、大型二階付きの貸切りバスでアカブルコまで長距離観光が始まつた懐しき町並みを脳裏に焼き附けながらバスは一路、クエルナバカへのハイウェーを突走る。制限速度なしの素晴らしい道路が、かげろうの彼方に消えていく。

今日はあいにくの曇空で、有名なメキシコ富士といわれるボボカテ。

トル山（五七〇〇メートル）やイスタシワトル山（五七〇〇メートル）がはっきり見えない。エアコン付きのデラックス車は、高原の車影の少



クエルナバカの広場にて
物売りの少年少女

モレノ州に入り、クエルナバカに近づくと、道にそつてあつちこつちにアフリカチューリップの真赤な花が咲き乱れて目にしめる。約一時間でクエルナバカに着いた。シティと違つて牧歌的で、インディオは体格と云い、日本人によく似ている。人類学的には東洋民族で今から一万五〇〇〇年程前、マンモスを追つてアリウシャンからアメリカ大陸に入り、メキシコに定着したそうだ。これは一年中温暖で標高一五〇〇メートル、一年中きれいな花が咲き乱れてシティ近郊第一の保養地でもある。一行の中二八名はホテルヴィラインターコンチネンタル、他の一〇名はホテルウノ・ドス・トレスと分宿になつた。

ホテルというよりも保養地の田舎屋という感じだが、メキシコ色豊かなエキゾチックな門構え、平屋建築の扇型の家で芝生の美しい庭が広がる。我々の一行だけで満員の様な感じ。自動車の騒音もなく、人影も少く、インディオのメードが四、五人いるだけで久しぶりに固苦しさから開放されて、思い思いのラフスタイルでのんびりくつろぐ。

午後三時頃よりバスで市内遊覧に出かけた。ソカロ広場に行きコルテス宮殿の見学、中世紀の重厚な建物である。

ここでメキシコの歴史を語る壁画を見るが、スペインの侵略ぶりが説明なしでもよく分る。メキシコは中年以上の国民約三〇%が文盲とか。その点、壁画は一目で分る仕組になつてゐる。何處へ行つても壁画と原色の壁と花が目につく。

この辺は下町に属し、物売りの少

年少女が垢じみた服装で、はえのように寄つて来る。しかし暗さはなく、人なつっこい。夕暮迫る頃、ホテルに帰り今夜はメキシコ政府の歓迎レセプションの予定だが、肩の張る所はお断りと変更し、このホテルの庭園で我々だけのパーティを行なう事になった。日もとつぱり暮れた頃から思い思いの服装をし、訪問着の盛装で出て来る女性もいれば、スポーツシャツだけのラフスタイルの人と雑多だ。

我々はシティで買った銀製のペンドントを首からさげて、日本では恥かしくて出来ない様なグルーピーサウンドに似た姿で出る。ガイド氏自慢のテキーラのカクテルで乾杯。芝生一杯に広がつてゴーゴーやフオーラダンスに興じ、二組のマリアッチが交互にリクエストに応じて演奏してくれる。星は満天に輝き夜風が気持

良く、異国での開放感も手伝つて老いも若きも夢中になつて日頃の苦労は全部吐き出し、本当に楽しい一時であった。終りに近づいた頃、日系二世の中西サルバドル氏が夫人同伴で迎えに来た。日産自動車のクエルナバカ工場の重役で、たびたび日本に来ている。私は約一ヶ月程前に尾松氏の家で一度会つた人である。夫人は典型的なメスチーソのメキシコ人で日本人好みの美人である。

好意に甘えてホテルの裏側に当るスペイン風の閑静な家を訪問した。日本茶とおせんべいで日本の話、メキシコの話に打ち興じた。可愛い子には旅をさせよという事で小学校三年生だが、日本に留学さしてゐる。尾松氏が「大へん元氣だ」と話すと、やはり夫人は涙ぐんでいた。子を思う心は洋の東西を問わないと痛感した。間もなく夜のクエルナバカを車

で案内してもらう。何処を走つても人影が少い。名も知らない公園の丘に降り立ち地理を説明してもらう。町の灯を見ていると日本の丘に立つている様な錯覚さえ感じる。日本の特飲街の様な所に案内してもらつたが、日本のナイトクラブの様な華やかさはなくわびしい感じだ。ここで

もメキシコ人に間違えられて「ソイハ・ボネス」というが、変な顔をしている。何かいい事をしたつて? まじめ人間には刺激が強すぎます。カクテルの酔が廻つて眠くて仕方がない。中西氏にホテルまで車で送つてもうう。ごそごそとベッドにもぐり込み朝までぐつすり。

タスコ編

十月十七日 (晴)

芝生は朝露にしつとりぬれて静かである。毎日あくせく働いていた

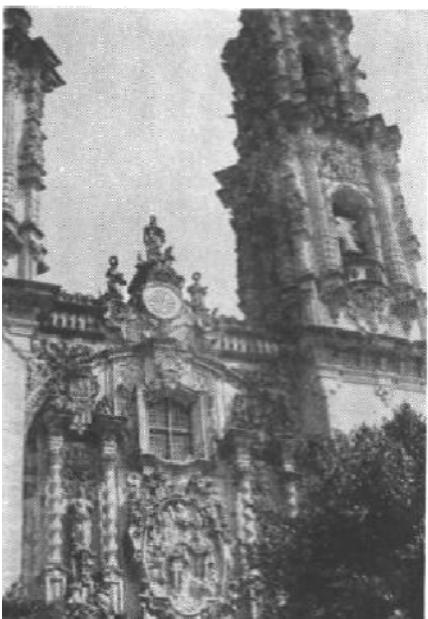
我々には素晴らしい朝だ。本当にすがすがしい。九時にタスコへ向けて出発。バスに乗ると米沢先生(長野)の知人と新井夫妻(在留十三年)が赤ちゃん連れで乗つてこられた。

我々一行の為にお世話しようということである。道は二車線で、両側には小豆色の火山から堀り出された土が敷かれた歩道がついている。車

は火山台地を通り、果樹園を過ぎ、綿畑を経て、一直線にひた走る。途中、イグアナ(この地方に生息する大トカゲ)を持つた少年をモデルに

これと買い求める。

曲りくねつた狭い石だたみの坂道



タスコのサンタクリスタ寺院

おいしそうだが、どうもグロテスク

である。鳥肉に似て

ない。まもなく日さすタスコの町が見えて来た。標高一七〇〇メートル、銀の町としても有名で建物は十八世紀につくられた古いスペイン風の家が山の頂上まで立ち並び、緑に囲まれた静かな町並、画家が見たら絵になる町である。バスから降り、銀製品の店で色々な民芸品を観賞、あれこれと買い求める。

をタタシーでサンタクリスタ寺院に着いた。この寺院は一七一六年ホセデラボルダが銀鉱を発見した時に寄附したものである。歴史の匂いがこもった素晴らしい寺院で、立派な壁画で被われている。

昼食はホテルザボルダですることになり、さすがタスコで一番のホテルだ。山頂のザボルダからはタスコの町が一望に見下せ、スペインの町に来たという感じで、丁度京都の都ホテルをクラシックにした様な感じだ。新井氏夫妻からのおにぎりと卵焼きの差入れで、日本の味をかみしめ、又こここの料理もしつつこくなくおいしかった。

帰りにうとうとしながらクエルナバカのホテルへ戻る。好奇心のかたまりの我々は、夕食までの間、新井さんの案内で下町の見物に出かける。我々も相当日焼しているから町の中を黙つて歩いておれば、メキンコ人と間違えられそう。特に私は奥目で長顔だから本当に間違えられて困った。嘘のようなほんとうの話。スペイン語はポキト（すこし）しか分らない。夜はさすがに疲れ、再び中西サルバドル氏から招待を受けたが、尾松氏だけに行つてもらい、さらさらと吹く風の音を耳に夢路をむさぼつた。

本調豊かな明治、大正の歌や軍歌が主流で、若い人はフォーカソングで大いに歌いまくった。窓外はロバに乗った現地人がのんびりこちらを眺めている。峠を越える頃からスコールが降り出し、皆うとうとし始める。単調なエンジンの音を子守歌に眠つた。いよいよアカプルコに近づくと、亜熱帯らしく椰子の木が樹立するのが見え出した。雨も上がり、物置の様な現地人のみすばらしい住居が山のあちこちに建てられている。眼下には青く澄んだアカプルコ湾と高層ホテルが見えて来た。ちよつと見は熱海の様だ。三時三十分我々が泊ま人に手を振りバスはアカプルコへ向つた。マンゴー島を過ぎ交通量の少い無人の境を突走る。維かがマイクに向つてお国自慢の民謡を歌い出すと、次々にのど自慢のオールドセニヨルやセニヨリータが歌うのは、日

十月十八日

アカプルコ編

静かな異国の町クエルナバカに別れを告げ、純朴なウエイトレスや村人に手を振りバスはアカプルコへ向つた。マンゴー島を過ぎ交通量の少い無人の境を突走る。維かがマイクに向つてお国自慢の民謡を歌い出すと、次々にのど自慢のオールドセニヨルやセニヨリータが歌うのは、日

車を降りるとむつと暑さが体に伝

わり、汗が背中を流れる。ホテルは湾を一望に眺められる様に建てられ、前は砂浜の水泳場になり、ヨットがここかしこに浮かんでいるが、泳いでいる人はほんの二、三人で、日本の海水浴場とは比べものにならないほどすいている。旅装を解くのももどかしく持参の海水パンツで一浴びし、やつと人心地がつく。灼熱の太陽と椰子の葉蔭、チリ一つ落ちていない白砂に寝ころんで何も彼も忘れる。聞くところによると十月から次の年の三月までは暑過ぎてシーズンオフとの事、涼しい時期が混むそ�である。しかしに日本の海水浴場の様なことはなく、ゆつたりしているそうだ。疲れるとホテルのプールで水遊びをし、夕方迄のんびりと過ごした。夜は晚餐会で一人一人が立て自己紹介をし、添乗員と医芸クラブ世話役の人々にお礼を述べ、中で

も、塙夫人の感涙にむせんだ言葉にはこちらも目頭をあつくした。

主人は体が不自由で決死の覚悟で出て参りましたが、皆様のお力添えで今日まで無事来られましたと。この美しい夫婦愛に一同感激に浸った。

この様子を見ていたメキシコのインテリらしい青年が、英語でメキシコへ来た事を心からお礼を申し上げます。どうぞゆっくり楽しんで日本への良いおみやげにして下さい。グラシアス。ほんとに感激の一時でした。

十月十九日

九時三十分、軽装で出発。アロハにベンバーシュウズ、麦わらのソン

るので、持参の日本茶と梅干で、日本に残したカアちゃんの話、身の上話と話題はつきない。スコールも止み、夜空に星が美しく輝き出した頃眠りについた。



アカブルコのロケッタ島で。
タバコ売りのセニヨリータと筆者と尾松氏

ブレロ、サングラスと現地人顔負けの格好でタクシーに乗り椰子並木の海岸線を渡止場に向つた。道幅が広く美しい。今日はオリンピックのヨットレースがあるので、万国旗や五輪のマークが良く目につく。空も海も紺碧で太陽は容赦なく照りつけ、百を越えるホテルが海に面した絶壁上にそびえている。日本の内海航路に就航している様な白い豪華船で、船内は原色のビキニ姿の各国グラマーモードで賑やか、どつちを向いてもウツシツシ。船はバンド演奏とともに出航。船内と船外とまことに忙しく両方の景色に見とれているうちに、早速アメリカの坊やに話しかけ、隣のハイティーン美人の姉さんと一緒に写真をパチリ。やめられませんなあ。

船は三十分程して入江に入りUターン。白いヨット、赤いモーターボ

ート、バナナの木と建物がマツチした美しい海岸線と、夢の様な船旅。高級別荘地帯を過ぎラ・ケプラダの断崖を見て、船は海水浴の出来るロケッタ島へ向つて進んだ。この島はいかにも南洋の島と云う感じで熱帯樹が茂りエキゾチックだ。ここでメキシコ料理に舌づみを打ち、タバコを売りに来たミニスカートのセニヨリータと一諸にパチリ。一時間程度帰路につく。船の回りには現地人がカヌーで海産物を売りに来ている。船上ではボーイの留守を見て、大野さゆりちゃん（女子大英文科一年）はカウンターにもぐりこみ臨時バーテンをやり出した。日本の少女（向うでは本当に少女に見えるらしい）バーーンは爆発的な人気で長い行列が出来、白人も黒人もここに。汗だくの奮斗だ。見ても頬笑まし。今日はメキシコ焼けに磨きがか

つて黒光りする程に焼けた。ホテルで一休みして塩人夫妻、柳原君と我々は下町の探訪と買物に出かけた。その姿たるや、私はスリップをひっかけ、尾松氏はパジャマに素足、まさに高級ルンパンの格好よろしくタクシーに乗りこみ下町へとぼした。ごみごみした庶民の町で戦後の闇市の如し。夕方近いせいか露店からはトルティヤの煙や食物の匂いが重なって独特の臭氣が漂う。素足族も多いがどう見ても体裁が悪いので、ワラッチと云う御当地製の履物を買う。イグワナの剥製も日本円に換算して五、六百円で買えるほど安いので色々買物をしている間に日もとっぷり暮れ、あわててタクシーを捨ててホテルに帰つたが、夕食時間におくれ、ペコペコとあやまりやつと食事にありつけた。皆の目がお土産にうつり羨しそう。ちょっと得意顔に

なる。プールで一泳ぎして寝る。今夜でいよいよアカブルコもお別れか。

ロスアンゼルスへ

十月二十日

暑くはあつたが、前日より良くなれた。七時半起床、朝食がおいしい。

ここは日本の様に磯の香りがない。荷物の整理をして、メキシコ滞在最後の数時間を見残り惜しみつつフルで一泳ぎ。十二時、貸切バスで空港に向う。ああ、これでメキシコも見收めかと思うと胸が熱くなる。ア

ロハシャツの軽装でウエスタン航空の七九六に乗り込む。窓越しになつかしの山々や、海岸線に目をこらして、思い出を反芻しながら別れを告げた。アディオス・メヒコ、機内は冷房が効いていてやつと人心地が着く。

今回は初編に述べた様に、アメリ

カも思い出が沢山ありますが、メキシコにしほつたために残念ながら割愛します。

二十一日はロスの見学、二十二日はパンアメリカンでハワイの観光と宿泊。二十三日なつかしの日本に向つて出発、二十四日午後八時、無事羽田到着。

帰国

十月二十四日

午後八時、小雨そぼぶる羽田空港

の定位置にぴたり安着。申し合わせた様に無事帰国出来た事を喜ぶ拍手が起きる。ほつとした気持で、スチュワーデスに手を振りながら、タラップを降りた。長い廊下を歩くうちに気候の変化か、どつと疲れが出て来た様だ。いよいよ話に聞く税関吏のいる検問所が近くになり緊張感が体の中を走る。思い出のお土産がつま

ったバッグを受け取り、人の良さそえたのか、オリンピックの関係の方ですかと聞かれたので、「まあそうです」と神妙な顔をしていたら、御苦労様と形式的に開けただけで三分钟かららずにすんだ。早くここから脱出しなければとドアーから外へ出て汗を拭く。やれやれ運が良かつたわいと心の中で一人つぶやく。

出迎えの家族の方々が沢山来ている。先に出た大久保さんや、医芸クラブ関係者が心配顔で待っていてくれた。相棒の尾松氏がなかなか出来ない。大阪までの航空券を買いたい行き戻つて來たが、まだ来ない。いろいろしながら待つ。時間は刻々と迫まり、二週間同様に過ごした皆と別れの挨拶も何か名残り惜しい。あ……尾松氏がやつと出て來た。

どうだつた。いやーいかれた。大事な本を没収された。残念……。

我々と大阪の和田先生は九時半発大阪行の日航機で帰途に着いた。両手に持ち切れないお土産を抱えて、カアチヤンや子供の待つマイホームへ急いだ。

我々にとつて生れて初めての海外旅行で、しかも日本の裏側にまで脱出することは大きな冒險を試みる様な気持で落ちつきませんでした。朝焼けにかすむアメリカ大陸を見てやつと落ちついた様な次第です。

振り返つてみると、本当に楽しかったの一語につきます。

北は北海道から西は大阪までの見ず知らずの寄り合い世帯なのにすぐに打ちとけ、数日を経ずして十年来の知己の如き親密さが出来たのも異国での連帯感と、同じフライパンの

卵を食べたせいもあるでしようが、皆がそれぞれ個性を持ち人格的にもすぐれた人達だからです。我々は大いに学ぶ所がありました。そして全国にまたがつて親友が出来ました。

今回の旅行が成功したのは、世話係の方々の綿密な計画と誠意ある配慮が、大きなウエイトを占めていることを忘れる事が出来ません。又事故者が一人も出なかつた事も幸しております。

アメリカも勿論良かつた事は間違いないありませんが、それにも増してメキシコが良すぎました。

メキシコと云えば、ソンブレロに口ひげにサボテン程度の知識しかありませんでしたが、この目で眺めたメキシコの何と素晴らしいこと。

しかし我々はセット旅行でメキシコの表面を一なぜただけで、本当のメキシコを見るには期間も短いし、

言葉も分らず余り大きな事は言えませんが、狭い国土であくせくひしみあつて暮していた我々は人口密度の少い広々した広野は、何もかも忘れて開放感にひたれました。

体格も顔付きもよく似ている事も手伝つて、親近感がもて、特にオリンピックの開催期間でもあつたせいか親目的で、人々つっこくすぐ友達になれる様な雰囲気でした。

日本人には間のびする程のんびりした国民性、もつと若ければ（今も若いが）永住したい様な気持ちになりました。

今から思うと夢の様です。現実に戻ればあの時の笑顔はどこへやら、仏頂面で患者の応対に追われる生活。しかし今度の旅行では、お金で買えない心の土産を沢山買う事が出来た事が最大の収穫でした。又、日本の良さを再認識しました。次のミュ

ンヘンには、もつと英会話を勉強し？又再会出来る日を楽しみにしております。どうか関西の漫才コンビをお忘れなく。　※（原文まま）

メキシコ旅情

遠い異国は　メキシコの

ソンブレロに似た　スタジアム

ゆれる日の丸　メヒコの叫び

ハポン　ハポンの　手拍子に

歩むは日本の　選手団

今ぞ　オリンピックの

聖火　燃ゆ

思い出のメヒコ

濡れた瞳の　セニヨリータ
ああ、旅情ゆたかな
アカプルコ

一人テラスに　たたずむは
熱砂に寄せる　波白く
影をおとした　熱帯樹

たたずむは
夜空にきえて
波白く

たたずむは
熱帯樹

セニヨリータ
クエルナバカの空青く
土の香りと白い壁

ブーゲンビリヤの花の下

一人はスケッチしてました

一人はカメラを向けました

一人はいねむりしていました

ほんとに静かな町でした

野を越え山越え車は走る

熟れたマゲイの　実も赤く
昔采えし　マヤの跡
インディオの　ひげが頬笑み
テキラで　サルー（乾杯）
高く奏てる　マリアッチ
ああ、旅情に燃ゆる

メヒコの灯

アカプルコへのハイウェー
皆が笑つておりました
皆が歌つておりました
ロバや羊やインデオも
皆が夢見ておりました

椰子の葉蔭に赤い屋根

南国の太陽はギラギラと

皆が黒くなりました

皆が仲間になりました

皆がメヒコに恋をした

親友よさよなら

さよならメヒコ

クエルナバカとタスコ

中橋　光男

今回のアメリカ・メキシコ旅行で、特に印象の深かつた町はと聞かれると、私はクエルナバカとタスコを先ず第一に

挙げたい。

ホノルルも、メキシコ市も、アカブルコも、夫々に特徴あり魅力ある町だが、何故か私はクエルナバカとタスコに限りない魅力を感じた。

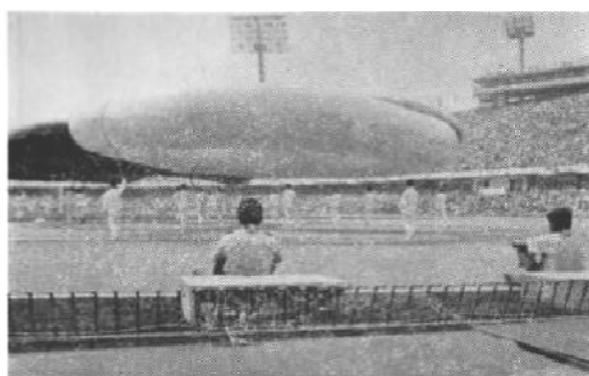
クエルナバカで先ず私を喜ばせたのはホテルだった。宏壯で、デラソクスなホテルばかり経験して来た私連にとつて、平屋建で、而も樹々の茂った大きな庭を囲んで部屋のあるこのホテルは誠に寛いだ気持を抱かせるに充分だった。私の思い違いかも知れないが、HOTEL VILLAーの名前に正にぴったりの感じだった。又觀賞用植物に多少興味のある私にとって、大人一人でも抱え切れぬ位のデコラ種のゴムの巨木、一米以上もあるポインセチア、ゼラニウム、パパイヤの木、コリウス、さては情熱的な「アメリカのチエーリップ」其の他数々の美しい花々に飾られたこのホテルの庭は限りなく楽しいものであった。然も朝とも

なれば、きれいな芝生の庭には黒い、尾の長い小鳥が陽光の下、轉りながら飛びかついて如何にも長閑である。

ホテルの裏手に当る道を隔てて直ぐ目の前にカトリックの教会がそそり立っているが、朝夕七時頃ともなれば鐘をつく僧侶の姿がホテルの庭から眺められ、信者が坂道を登つて教会に礼拝に行く様は如何にもカトリックの国メキシコらしい風景である。一方ホテルに沿つた街路には真赤な五瓣の花をたわわにつけた「アフリカのチユーリップ」の並木が続き、その間に一際高く椰子の木が点在して遠い異国に来たという実感がにじみ出で来るのである。

この町に来て、内心多少期待していたメキシコ政府主催のオリンピックパーティに出席を取止めて、このホテルの庭でパーティを開くとメキシコ人ガイドのラウル君が提言した時には一寸がかりさせられたが、然しこの我々仲間丈

のパーティは結果的には却つてメキシコらしいムードに満ちた楽しいものになつた様である。夕暮れと共に暗くなつてきたホテルの芝生では、メキシコ人樂師の奏でる音楽に合わせて同行の令嬢や若い夫人達が楽しげにダンスに興じ、



オリンピック開会式風景



オリンピック競技場前の広場にて
(右 金成桂一先生・左 筆者夫人)



メキシコ人の子供と大とかげ

クエルナバカの夜を思い切り満喫しているかの様であつたが、メキシコシティ以来歯肉の腫脹といたみに悩んでいた私は、この夜フウル君調合するところのテキラカクテルに酔を覚える頃痛みは正にクライマックスに達し、たまりかねて部屋に駆け込むや、テキラとチャンギ

ーロングの酔による麻酔?を利用しても遂に安全剃刀の刃で切開を自ら試みたが、膿瘍に達しないばかりか、手許が狂つて上唇を切つて鮮血が滴り落ち、妻をいたく心配させる仕儀に立至つたが、更に勇を鼓して今度は縫針で穿刺して漸く排膿の目的を果し安堵の胸を撫で下したが、お蔭で肝腎のペーティは時々部屋の外のベランダから眺めて楽しむ程度で終つたのは、返す返すも残念なことであった。

儲て私は、「オテル・ヴィラ・インテルナシヨナル」に余りに多くのスペースを費した様であるが、このクエルナバカの町 자체も大いに気に入つたことは冒頭に書いた通りである。

モレロ州の一大都会のこのクエルナバカは人口七万五千人と聞いたが、メキシコシティのお金持達の保養地とかで、成程高原の都會らしく空氣澄で、一年を通じて温度は摂氏二五度位とか。街は静かで至る處に「アフリカのチューリップ」その他、色鮮やかな熱帶性の花々が咲き乱れ、静寂と自然を愛する私には永住の地ともしたい位の街の姿で、永住はとても叶わぬ夢ながら再遊の気持が湧然と起きるのを止めるることは出来なかつた。

さて、この町に着いた日の午後見学したコルテス宮殿の絵の様に美しい建物や、内部に飾られたディエゴリベラ等描く壁画などに就いても語らないのは片手落ちになることは承知しているが、丁



ユニバーサル撮影所の西部劇牢屋のセット



金門公園のシュトラウス像
(左から和田先生、千葉先生、岩本夫妻)

度この頃の私は例の歯痛と烈しい頭痛に悩んでいた時であつた為、見学も上の空だったことを申上げて省略することを許して頂き、次のタスコにペンを進めることにしたいと思う。

十月十六日、メキシコ市から、クエルナバカに到着した私達は、翌十七日の午

前十時前にホテルを出発、大型バスでタスコ見物に出掛けたのであつた。タスコ迄約二時間のバス旅行で、眼に入るものと云えば、山や畑ばかりであるが之が又、実際に私にとっては嬉しい風景であつた。

水稲、玉蜀黍、砂糖黍、綿等の畑が何処迄も続き、農民や家畜が点在する丈で行き交う車も誠に少く、車と人との間に理まつている日本を思つて何とのびのびすることかと思つたことであつた。然し、

こうした風景の連續にいさきかあきかかつた頃、突然絵の様なタスコの町が遥か前方に見え始めた時は、思わず感嘆の声を放つたものである。

タスコの街は政府の命令で、スペインの植民地時代そのままの町の姿を伝えているとはガイド君の説明であつたが、赤いスレート葺きの屋根、小石を敷きつめた狭い道路が特徴である。やかましい自動車のクラクションを鳴らす音も聞こえず睡つた様に静かで、十八世紀のヨーロッパの町に迷い込んだかと思える位だ。

この町は銀鉱の町として有名であるが、銀鉱を発見して数年ならずして巨万の富を得たホセディア・ボルダの名を冠した「ホルダ」は誠に美しいホテルで、ここバルコニーからの素晴らしい眺めは言語に絶する位だ。必ずしもデラックスな



カイナマホテル横のコダックショウ

ホテルと云うのではないが、この町の環境に完全に調和のとれたホテルと云う可きか。しまれこにも再遊の機会あらば一二三日ゆつくり滞在してみたいホテルであり、町ではあつた。

タスコの町でもう一つ書き落す訳に行かないのはサンタプリスカ寺院であろう。この教会はボルダが銀で巨富を得



フラダンスの prima と筆者

表したい。

いやもう一つ忘れてならないのは、主催者側の御好意で予定になかったタスコ見物をさせて頂いたことである。本当には有難う。

(写真 中橋フミ)

※ (原文まま)

た幸運を神に感謝して寄進したものと云われるが、このメキンコの代表的なバロッタ建築と云われるサンタプリスカ寺院は、この町では一際高い建築物で、そのスケールの雄大さ、その莊厳さは瞠目に値する。只、内部を拝観出来なかつたのは心残りであったが。

こうして私達は楽しいタスコ見物を終えて夕刻満ち足りた気持で懐かしのクエルナバカに帰つて来たのであるが、

このタスコ見物に同行されたクエルナバカ在住の邦人

夫妻（お名前は申訳ないが失念）からお

握りや漬物の御馳走になつて遠い異国のかみを味わわせて頂いたことに対する心からの謝意を

表したい。

『春のシャンソンの夕べ』

開催

—古坂るみ子コンサート—

白矢 勝一

当クラブ洋楽部会員の古坂明弘先生の実姉で、プロのシャンソン歌手でいらっしゃる古坂るみ子さんのコンサートが東京都小平市にあるシラヤアーツベースにて開催された。

2015年4月18日（土）17時

からピアノをバックに純白の衣装で登場された古坂るみ子さん。会場には古坂明弘先生を始め、同じ洋楽部の奥村秀先生もかけつけた。コンサートの始めに奥村先生から、古坂るみ子さん、古坂明弘先生のご両親が紹介され、才能あふれるご兄弟を育てられたご両親に拍手が送られた。

その後、公務の忙しい中、駆けつけてくれた小平市市長の小林正則氏からの挨拶をいただき、コンサートが始まった。

煌びやかなオーラを身に纏い、古坂るみ子さんは、『バラ色の人生』『さくらんぼの実る頃』など数曲を熱唱された。来客者の横を歩きながら歌われたり、微笑みかけたりしながらの歌唱に来場者は魅了された。

続いて古坂明弘先生が唄を披露され、古坂るみ子さんとのデュエットも披露してくださった。

来場者みんなで歌えるよう

歌詞が配られる配慮がされ、会場が一体となつてのすばらしいコンサートとなつた。

恥ずかしながら私も、本日の進行を務めてくださった玉澤明人氏とともに、ギターを奏で、唄を披露させていただいた。会場の暖かい雰囲気を包まながら数曲歌わせていただき

いた。

第一部として、軽食やおいしいワインなどを飲みながら、歓談したり、飛び入りで唄を歌つたりと、なごやかなひとときとなつた。古坂るみ子さんも参加され、来場者と気さくに話してくださった。

たくさんの笑顔と素敵な音楽につまれ、贅沢な時間を過ごさせていただいた。出演者、来場者、コンサートの開催を手伝つていただいたすべての方々に深謝である。

古坂るみ子さん／紹介

東京都出身。「ハムレット」で初舞台。国立劇場で「オセロー」のデズデモーナ役で出演、文学座新人賞を受賞。1989年4月に有楽町朝日ホール2日間芝居形式の初リサイタル「ダリダの生涯」を開催した。1995年9月及び2003年9月に草月ホールにてリサイタルを行い、そのライブのCDをそれぞれリリース。

2013年コンサート「懐かしい恋人たち」を開催、3枚目となるライブCDを発表。現在舞台出演のかたわら、都内のシャンソニエ、ライブハウス、全国各地のホテル、ディナーショー等に出演している。



戦後七十年

老医師と主婦の歩いた

『続々 玉碎の島 サイパン』

美濃部夫妻が実際にサイパンで撮影した写真を豊富に掲載。戦跡をたどる哀しくも美しい島サイパン。



戦後70年となりました。

このリーフレットは、私たち夫婦

美濃部 欣平
美濃部 幸恵 著

が玉碎の島サイパンの戦跡をめぐつた3冊目の随筆です。

本誌で連載中の『生還！・バンザイ突撃に参戦した軍医中尉』をまとめた一冊。

今回は「最後の総攻撃」に参戦し奇しくも生還された海軍軍医中尉の戦記をもとにサイパン島での経路をめぐりました。

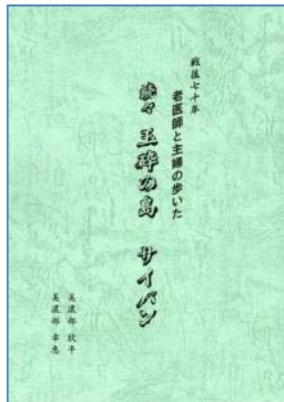
サイパン奥地の戦跡は年月の経過と共に関係者も高齢化し、訪れる人もまれになり風化していくとして居ります。やがてジヤングルに包まれて沈黙するか、又は個人の所有地となり宅地開発され戦跡も少しづつ姿を消そうとしております。

サイパン玉碎より71年、拙い文章

写真で恐縮ではございますがページをめくっていただき、激戦地の過去からの声をお聴きいただき幸甚でござります。**【ごあいさつより】**

(株タウンニュース社)

会員の著作を紹介する欄です。
近著を事務局まで送つて下さい。



戦後七十年
老医師と主婦の歩いた

『続々 玉碎の島 サイパン』

美濃部 欣平
美濃部 幸恵



文芸特集号は発行経費を執筆者で割り、負担していただいています。執筆の希望者が少ないと発行できないこともあります。まずは、別送

いたしました、『二〇一五年 文芸特集号 執筆者募集のお知らせ』をお

読みになり、ご希望の方は、申込書に記入の上、事務局までお送りください。

- (一) 内容は自由
(二) 枚数に制限はありません。
一枚24字詰め×22行2段組
が基本の1頁です。
(明朝体 11ポイント)

※ルビがついたらりすると変わ

ります。
原稿の締め切り
九月十七日（木）まで

(三) 頁負担金 1頁千五百円。
ただし、詩や短歌は1頁千円。

(四) 雑誌購読 予価五百円。

執筆者一人二十部以上。

(できるだけ多くの部数の購
読をお願いしています。)

※通常の年4回発行の機関誌も近年、
原稿の集まりが思わしくなく、発行
が危ぶまれる号も度々ございます。
現状からみて、今年度の文芸特集号

の発行は大変厳しいものと思われます。ご考慮いただけすると幸いです。

【事務局夏季休暇のお知らせ】

事務局は左記の日程で夏季休暇を
いたします。よろしくお願ひいたします。

日頃から電話など、つながりにく
く大変ご迷惑をおかけして申し訳ござ
いません。

平成27年8月6日（木）から
8月16日（日）まで

今後ともどうぞよろしくお願いいた
します。

透視像



初芝 澄雄

何時か透視像に書きましたが、私は田舎に行くには新宿駅から千葉駅まで電車を利用するのですが、今まで新宿から御茶ノ水駅まで、急行電車に乗り、ここで千葉行きの急行に乗り換えていました。ところが東京駅から、成田空港行きの電車が新設されましたので、住居の中野坂上から東京駅まで、直通の地下鉄電車に乗り、東京駅から成田行きの新設の電車に乗り換えて、千葉駅に行く事にしました。その時によりますが、成田行きの電車は一時間に数本発車しますので、千葉駅に行く乗車時間が非常に早くなつたのです。始めて成田行きの頃は千葉駅には停車

しますので、私は家を出てから、成田空港行きの電車に乗るために、今までの電車通とくらべて、非常に早く千葉駅に着く事が出来るようになります。

普段は中野に住んでいるのですが、毎週の様にこのコースを用いて、千葉市の生家に行きますが、この電車を利用すると非常に便利になりました。田舎に特に仕事もないのですが、毎週両方の家の雑事をしており、田舎の方の近所の人々と会えるようになりました。田舎の生家の方に人が少なくなった現在では便利です。

本誌編集作業のこの時期、東京は梅雨真っ只中です。しかし今年は例年と比べて『雨』というより『湿気』に悩まされていいるような気がします。雨が降らない日でも湿気が多く、暑いのか、肌寒いのか、なんとも言えない陽氣です。西日本は豪雨が多いとニュースでやつっていました。雨による色々な被害も出ていると聞きました。皆様の地域は大丈夫でしょうか。
さて、今年もまた『文芸特集号』の原稿を募集いたします。近年原稿集めが非常に厳しい文芸特集号です。是非、ご投稿をよろしくお願ひいたします。詳細は同時期に別送いたしました。案内をご覧ください。暑さに負けぬよう、お体ご自愛くださいませ。

(ES)

編集後記

